J2.99:18

18 of 20

July 1945
Vol. 3, no. 7

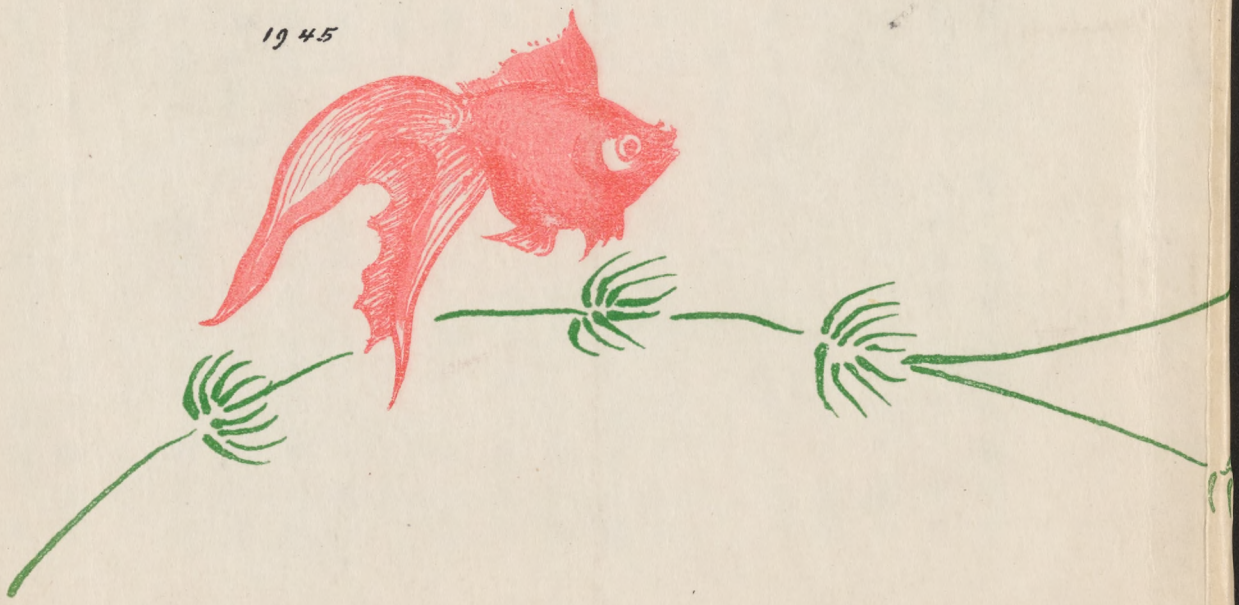
67/14
C

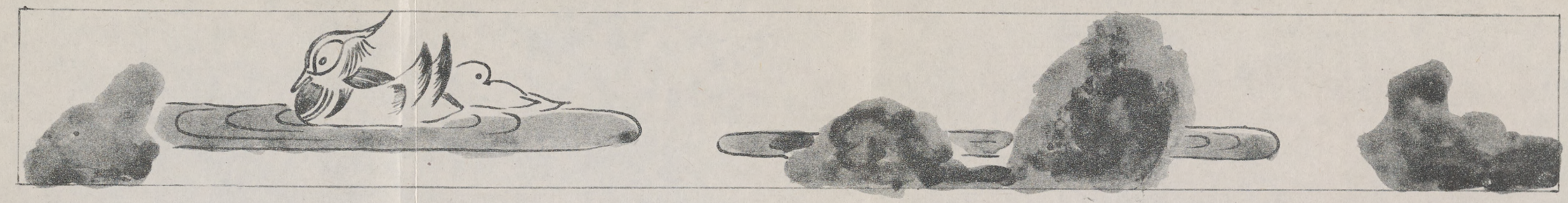
Mrs. P. Brown

邦ストン文藝

七月號

1945





ポストン文藝　七月號　目次

表紙寫眞（舞踊夕月）　大森和子
巻頭言　小坂芳雄　一
大和民族の起源　野田夏泉　三
放論二題　谷川江浦草　一二
人間は神化する　松原信雄　一六
花柳德八重さん　さすが　二〇
ポストン生活印象　貴家しま子　二四
寶石の話　新関惣太郎　二八
殉教物語　恒吉盛花　三四
緑蔭に綴る　外川明　三七
漢詩と吟詠　鈴木胡仙　四一
ポストン文藝の回顧　矢形溪山　四五
ポ文創刊時代の思ひ出　石川凡才　五〇
僕の雜記帖　松原信雄　五三

詩
初夏　希ひ　露　生活断章　題　月光へ祈る　夢の園　あきら　二
牧さゆり　4
芥川滋男　5
片井溪巖子　6
マツイ・シュウスイ　7
木内春波　8
北見潔

俳句
新舊俳壇　10

短歌
皐月詠草集　15
選後隨錄　永瀬勇　22

柳川
添句集　島原潮風　26
削句會　32

創作
おもかげ　木内春波　34
白百合　有田百　44
看護婦　羽根政春　50

編輯後記　55
カット　重富初枝
原板　瀧井謹平

花柳師匠の〝夕月〟

巻頭言

咲いては萬朶の櫻となり、瓦全を恥ぢて玉碎を希ふは、我が民族の誇るべき長所なり。而して其反面には、一氣呵成を欲して、焦燥にして短氣、持久性に缺ぐる所の性情ありて、粘力に乏しきことは、大なる短所の一なり。

按ずるに、來年一月二日を期して、各センターは閉鎖する旨の公布を見たる今日なれば、吾人はその好むと好まざるとに関せず、早晩、或は新生活に入るの餘儀なきに到らんも計り知るべからず。果して斯る境地に立ち到るものと假定する時に、吾人は所謂『七轉八起』烈々たる塊魄の下に、一歩を踏み出すに於ては、断じて吾人の前には不可能事といふ言葉はあるべからず。古語に

陽氣の發する所金石も亦透る。精神一到何事か成らざらん。と

宜なる哉。崎嶇たる行路難、鯨波澎湃たる航海の險は、山に非らず、水に非らず。唯是れ人生世に處する間にあるのみ。故に其の難を凌ぎ、其の險を冒して初めて目的を完遂し得べきなり。夫れ

蘭花は幽谷に生じ、劍は烈士に歸す。

吾人は如何なる事態に直面するとも、七轉八起、臥薪嘗膽の精神を盾として、國籍の命ずる處に従ひ、大義名分を誤らざらんことを、此の際特に懇願する者也。（H・A）

初夏

おゝ　さうか　風よ。
お前もそこにゐたのか
頭上の白いカーテンを　ふしつゝ
音もなく遊んでゐるお前
私はたゞひとりだとのみ思ひつゝ
机に向つて思索してゐたが
何といふうれしいことだ
初夏の感情に満ち満ちた
碧瑠璃の空の窓際に
雪の如うな紙をひろげて
かうしてお前と二人で
詩の生れるのを待つてゐる……

あ　き　ら

この清々しきひととき。

（一九四三のノートより）

大和民族の起源

野田夏泉

一、現代の日本人

現代の日本人種中の一部には種々なる人種が混入して、非常に複雜な人種を構成して居る事は一般人種學者の一致したる意見である。

日本語の多源性を見てもそれは解る。即ち日本語の第一人稱に私、俺、僕、拙者、あたし、わたし、われ、わい、うら、あたい、わし等々あるは、言語の多源性を示すと同時に民族の多源性をも物語るものであるとは、日本民族學及び言語學研究で有名なリバース教授の説である。南洋の一孤島に於ては今尚第一人稱に「われ」なる語を使用して居る土人が居るさうである。

四面海に圍まれた、風光明眉なる島國の日本國へは太古より種々なる人種が、或は偶然的に漂着し、或は計畫的に移住して來たものもあらふ。或はバスコダ、ガマの旅行記の中に「亜細亜大陸の東端沖にジパングと言ふ島國あり、金銀財寶充滿す。」などの宣傳記事に刺戟され、之を目的として渡來して來た者もあつた事は想像出來る。

日本は太古から三韓との交通は頻繁であつた。神代時代既に素戔嗚尊(スサノヲノミコト)は朝鮮に渡り、後の新羅(シラギ)の主府曾柴茂里(ソシモリ)（今の慶尚南道慶州）に其の居をお定めになり、其の子孫は新羅王となつた。又其の新羅王の後裔、田道間守(タヂマモリ)（垂仁天皇の命により南支に使し、非時香實(トキシクノカグノミ)、即ち今日の蜜柑を日本へ傳へし人）が日本へ歸化した事が歴史に殘されて居る。即ち素戔嗚尊の子孫は新羅人となり又其の子孫が再び日本人となつた譯である。如何に朝鮮と日本との関係が神代時代から密接であつたかが此の一例によつても明らかである。

支那方面は神武天皇の皇兄、三毛入野命(ミケイリヌノミコト)（神武天皇の長兄は彦五瀬命で東征軍に加はり途上戰死され、次兄稚飯(イナイ)命は朝鮮に渡られ、次は三毛入野命。神武帝は第四番目。四人兄弟の末弟）は支那に渡られた事は、古事記、日本書紀が傳へる所である。

其後唐時代即ち六朝時代は盛に遣唐使を送り、又學者や諸種の職人が日本へ渡來し、朝野共に支等支那人を好遇した爲に多くは日本へ歸化した。後世將軍家初め、諸國の大名中にも此の歸化支那人を高録を與へて召抱へ、勘定方や書記職を司さどらしめて居るものが多かつた。當時支那系は優秀人として自他共に許して居たものである。紀州德川家に於ても明治初期頃迄歸化支那人の子孫が書記方に就任してゐた。然も「歸化支那人何某何代の何某」と名乘つて居たらしい。忠臣藏四十七士中の武林唯七なども「秦の始皇の宗孫也」と大音聲に名乘る所がある。

秦の始皇は賢明な皇帝であつた。海外發展を國民に奬勵したが、其の實績を擧げる事は出來なかつた爲、除福を總大將として、若い男女を船に乘せ、不老不死の良藥が東洋の一孤島にある、之を求めよと命令して出帆せしめたと言ふ傳說もあり、此の船は紀州和歌浦邊に到着したとも傳へられて居る。

支那から南方に向つては、カンボチヤ、シヤム、安南、マレー系も混入して居る事が容易に想像出來る。

豐臣秀吉時代には比律賓呂宋には相當の日本人が入り込んで居た。堺の住人にして呂宋島通ひの船を持つ貿易業者、呂宋六左衛門の建議により、呂宋島の防備薄(ウス)と、豐公軍船を送れば呂宋は直ちに降服すべきを說かれた豐大閤は、比島大守に降服勸告狀(島の子紙に漢文にて認(シタ)ためニ重の蒔繪の箱に收む)をつきつけた事は有名な話であるが、降服か、反抗か、比島大守とスペイン本國間で議、決せざる內、豐公の征韓により窮地から脫した呂宋人は漸次日本人に壓迫を加へ初め、比島在留日本人はカンボチヤ或はシヤムへ避難し六左衛門は之等のエバキュエーションに大なる貢獻をした先驅者でもあつた。後、山田長政がシヤム王に忠勤をつくし、重臣として登用せられた頃は、長政の部下には日本武者が五百人以上も居たと言ふことである。カンボチヤは今の佛印、日本へ南瓜(カボチヤ)を傳へたとも言ふ。今度獨立した安南人、其他馬來人も多分に流入して居るであらふ。

其他に南方諸島人、ポリネシヤ人、インドネシヤ人も幾分混入して居る。比律賓人中のイルカノ族の言語は日本語に類似点多く、ニユーヂーランドの土人、

マリオ人種は今日に於ても、かはは川であり、ヒネは蝦である。日本南部地方人の用語中には、ポリネシヤン語が多分に混入して居る如く、人種に於ても混入は免れまいと思はれる。今日、日本領有地の南方土人等の言語を研究すれば、意外なる日本語の根源を發見して驚く事であらふと思ふ。

尚日本には、大和民族渡来以前からの先住民が居た。即ち熊襲、土蜘蛛、及びアイヌである。

太古、アイヌは日本全國に居住して居たものであらふ。今日、九州南部地方、日向、大隅邊では、長上(メウヘ)の事を、オーネ、或はオセと呼ぶ。之はアイヌ語の長上を呼ぶオンネより変化したものであり、能登半島のノトはアイヌ語の半島の意である。其他本州到る處にアイヌ語は残されて居る。日本武尊、御東征の時代に於てすら、遠江(トウトウミ)以東は、アイヌの巣窟であった。アイヌの平定は日本武尊御東征より陽成天皇朝まで、八百年を要し、其間、鎮守府を置き、城柵を築き、或は征夷大將軍を遣し、漸く蝦夷地即ち北海道に敗退せしめた。現今アイヌ族は僅か一萬八千位を数ふるのみで、尚年と共に減少の傾向を示して居る。然し、長年月中には雜婚により其の血は大和民族中に混入して、しまつた者もあらふ。

神武天皇御東征の時、大和地方には土蜘蛛(ツチグモ)蟠居して居て、之を御討伐された事が歴史に残されて居る。河内牧方(ヒラカタ)より軍を進められたが利あらず、熊野に廻航され、千津川傳ひに、大和へ進出されたのであるが、當時、熊野邊でも此の土蜘蛛に悩まされ給ひ、之を獰猛な熊に例へ、熊の住む野と命名され後熊野と

言はれるやうになつたとの事である。然し、土蜘蛛に就いての研究は詳にされて居ない。坪井正五郎博士説によれば、土蜘蛛は、コロボックル人種（蕗の下に住む人間の意）で、エスキモーの祖先であらうと言つて居る。エスキモーは今より百年位以前に日本本土から敗退したものであるが、土蜘蛛は果して太古日本國在住のエスキモーであつたか否かに就ては確固たる證蹟がない。

熊襲に於ては諸説まち〳〵であつて、熊は高麗（コマ）であり、襲は悍猛の義なれば高麗より渡来したる賊なる説（阿部弘藏氏説）或は熊は隈（クマ）で、山間に巣窟を持つ猛賊であるとも言ひ、或は山窩（サンクワ）の一種であるとも言はれて居るが、今は絶滅して其の蹟を殘して居ない。何れにしても新来の大和民族に比して、文明程度の低い、先住民であつた事に疑ひはない。

以上概記の如く現代の日本人種中の一部には、多種多様の人種が混入して、複雜なる種族を形成して居る事は、事實である。

二　建國の祖先

以上の如く現今の日本人種中には種々の人種が混入して居る。然し、我等の祖先、即ち日本民族の中堅を成す建國祖神等が、最初、日本國へ渡来して來た時は、單一人種であり、之等の子孫は純粹の大和民族である。以下説く處は、この純粹の大和民族に就いてである。

古事記や日本書紀には、其の緒言に、天地創造の説がある。之によれば、天

地の始は、天と地と明らかならず、水上に浮いた油、若しくは水月の如く、フラフラと天空に漂つて居た。然して透明の氣は騰つて天となり、混濁の氣は滯つて地となる。其の地上に葦の若芽の如く萌え騰がるものによつて神々が出現したと説いて居る。之は當時の思想であつて、傳説的のものである。

この天地創造の思想、即ち開闢思想は何處から來たか？ 之は明らかに、舊約聖書から來て居る。それでは舊約思想は如何にして千二百餘年前日本へ傳はつて居たか？。

西暦四三一年、エペソに於て、基督教大會の時、新思想を唱へ、異端者として破門されたネストリウスがスリヤのエデサに退き、新思想教會を建設した。この新教が、ペルシヤから五世紀頃、支那に入り、七世紀頃には、黄河の流域洛陽に入り、唐朝即ち六朝時代には、此のネストリウスの新教を唐の國教と定め、之を景教と命名したのである。故に日本書紀緒述以前、既に唐は基督教國であつた。後、空海（弘法大師）が入唐して、揚子江流域、寧波に赴かれし時、尚基督教の遺蹟が多く殘つて居たし、西暦八。四年には湖南省、長安の名刹、西明寺を尋ねられて居る。西明寺は、長安の四大景教寺院中の名刹であつた。

日本書紀完成の約十ヶ年以前、支那では劉知幾によつて「史通」なる書物が刊行されて、一大センセイションを起した。劉知幾は聖書を研究したものであらふ。日本書紀は「史通」の影響が多いと言はれ、書紀の開闢説は「史通」の開闢説と殆んど同一のものであると言ふ。故に日本書紀の天地創造説、即ち開

闘説は日本から言へば、一つの思想であり、神話であつて、土固まつて地が出來た時、建國の祖神、天御中主尊（アメミナカヌシノミコト）、次に高皇産靈尊（タカミムスビ）、神皇産靈尊（カンミムスビ）等が、葦の若芽の如く、日本國へ出現されたのではなく、それから何億年か何萬年か不明であるが、凡そ今から三四千年前、東方へ東方へと移動して来た、我々の祖先即ち建國の神々が蒙古、滿州を経て、朝鮮を過ぎ、極く優秀なる少數の一隊が勇敢にも日本海を渡り、日本國土へ第一歩を印せられたのが、我大和民族の元祖であり、建國の神々である。

三　地質學上よりの研究

地質學者によると、地球が生成してから幾億萬年になるか、それは計り知る事は出來ないさうである。其間、全大地が水下に浸し去つた事もあり、或は熱暑に蒸され、或は山野悉く氷河を以て蔽はれた時代もあり、或はノア時代の如く雨水の大洪水に遭遇したり、種々変遷の過程を経て來て居る。

地質學上よりは、太古、古生、中生、新生の四期に分類し、更に新生時代を第三紀と第四紀とに區別されて居るさうである。

日本國は何時頃形成したか？　地質學者の説によれば、太古から、中生時代の幾千萬年の間の事は、到底知る由なく、新生時代の初期たる第三紀頃から多少研究の端緒が開かれたさうである。

驚くべき大蝕蟲類が、漸く地上から姿を沒しやうとして居た中生時代の終りに、現北海道の地に突如細長い島の形成を見た。之が今日北海道の脊梁をなす蝦夷火山系である。今より約一千萬年以前の事である。

其當時亜細亜大陸が、漂移作用を起し、太平洋に進出しやうとする壓力により太平洋に面した大陸の緣に皺曲を生じ、其の盛り上つた一條の隆起を殘し、低い皺の部分が海水下に浸したのであるが、之が日本列島の原因と成り、後、火山系の活動、隆起作用、或は海水の減少により、今日の日本列島を形成したものである。

其の前、約一千萬年昔の關東地方は、今日の秩父連山は四面海に圍まれた方形の島であつて今の東京は勿論、關八州の平野は、秩父灣内の海底であつた。

中部地方は富士火山脈で、天城、箱根、八ヶ岳、妙高等を主体として隆起して居り日本の屋根であつた。

瀬戸内海は現在の二倍の幅と廣さ、長さがあつたらしい。今日東は大阪湾を限りとして居るが、當時は大阪平野、河内平野、奈良盆地、京都盆地及び、近江盆地も水下に在り、琵琶湖は瀬戸内海の東北端をなして居た。南側は讃岐平野、伊豫平野の大部分、北は廣島、岡山の平野共に海底であり、西は有明海まで連續して居た。故に今の九州は南北に二分されて居たわけである。

日本歴史の語る所に依れば、神武天皇御東征の時代に於てすら、河内平野は

海であつて、今の河内國牧方(ヒラカタ)まで、軍艦を進められて居り、今の備前國の児島半島の高島も其の當時は、離れ小島であり、神武帝屢し軍船を止められ、諸方偵察と軍備の充實を計られた所である。歴史有つて以來僅か二千六百有餘年の変動に於ても斯くの如きものあるを見ても、想像に難くない。難波の葦は伊勢の濱荻と言はれ、大阪湾、淀川川口、伊勢湾等、一面に葦の繁茂した寒村であつた事も左程昔の事でなく、豊葦原の名の如く、葦原續きの島國であつた事は想像出來る。

後、海水の減少と隆起作用によつて、琵琶湖を残して、奈良盆地、近江盆地等は乾いて陸となり、九州は阿蘇火山脈の活躍によつて南北陸續きとなつた。

書紀には最初大八洲(オホヤシマ)が形成された事が記されて居り、之を豊秋津島(トヨアキツシマ)(本州)於能古呂島(オノコロシマ)(淡路)、伊豫二名島(イヨノフタナシマ)(四國)築紫島(ツクシシマ)(九州「果て即ち盡しの意」)之に壹岐、津島、興岐、佐渡を加へて、最初の大八洲と解されて居る向きもあるが、大八洲は單に大八島の意に非らずして、無數の島と解されるやうになつて居る。日本では多數を表はすに八の字を多く使はれる。即ち八百八町、嘘八百、八尋殿、八束劔、八咫鏡等々の八の意と同様であらふ。數島の意味も無數の島の意である事から、右のやうに解するのが至當であらふ。

斯うして、日本國が形成した。此の樂園日本へ、我々の祖先、神々の一族が、亜細亜大陸から、海を越へて渡來して來られたのである。(次號完結)

放論 二題

言葉の濫用

谷川江浦草

「亜米利加と云ふ國はその國王を入札にて取り極めるものにて候」— 初めて太平洋を越えた若き日の西園寺公が日本への便りにこのやうなことを書き送つてゐる。今の吾々が之を讀むといさゝか皮肉を感じさせられるが、當時の西園寺公としては至極大眞面目であつたらうことは疑ひない。云ふまでもなくこの「國王の入札」は現代の言葉で云へば「大統領の選擧」である。又同じ西園寺公の外國便り中に、船中で可愛がつてやつた一佛蘭西少年がその別れに際し、公の頬にキスをしたことを驚いて「紅毛人と申すものは挨拶の代りに人の頬をべロ〳〵と舐めまはし何んら未開人と異るところなき樣に存じられ候」と述べてゐる。云ふまでもなくこれも現代語に譯すると「接吻」である。僅か六、七十年程前の日本語はそれ程いろんなことを表現するのに不便であつた。

ところが最近の日本語の豐富さはどうであらう。現代の日本語はそれで表現し得ない如何なる外國の思想或は言葉も先づ以つて無いだらうとまで云へる樣になつてゐる。否それどころか英語の大家市河三喜博士をして「八紘一宇の精

神」といふ言葉はどうしても英語に譯せないとさへ嘆ぜしめた程の言葉を日本語は數限りなくもつてゐる。それに加ふるに造語だ、新語だ、外來語だと全く應接に遑まない位に日本語は豊富になつた。それは一應いゝことでもあり、又その國の文化的水準を示す一つの尺度でもあると云ひ得やう。併乍らその反面に言葉の濫用が目立つて多くなつてゐるやうなことはないだらうか。

文章は簡潔を尊ぶ。嘘を本當らしく見せる爲に言葉を加へれば加へる程益々嘘が現はれて來る――と云ふことがよく云はれるが、簡單に言へることをむづかしく表現したり、又多くの形容句を加へれば加へる程その文章はだん〳〵内容の空疎なものになつて行き易い。これは言葉の使ひ方に愼重さを欠くため即ち言葉の濫用の結果ではなからうか。森鷗外博士は何か書くと必ず飯炊きのお婆さんにそれを讀んで聞かせ、お婆さんが完全に理解するまで字句の推敲に推敲を重ねたと云ふ話は有名であるが、學術論文でない限りさうした心懸けも亦必要かも知れない。學術論文で思い出したが、學術用語が不必要な程普通に使はれることも、言葉の濫用の一つとして何とかならぬものかと思ふ。例へば「理念」といふ言葉である。これなども理想とか主義とか或は信條とでも云ふべきところに矢鱈と使用される傾きがある。この言葉はもと〳〵獨逸語の「イデヤ」の譯語として出現したもので何でも九鬼周造博士の譯であつたと思ふが、これも哲學上に於てこそ色々の意味を持ちもすれ、普通に使用すれば些さか羊頭を掲げて狗肉を賣るやうなことになりさうである。その他、止揚とか辯證的

とか云ふ言葉なども無暗矢鱈と使ひたくないもので、さうすれば言葉の遊戯もだん〳〵減って行くことであらう。

文献のこと

いさゝか恐縮だが話は自分のことから始まる。學校に入って初めて自分の專攻する経済學の小論文を書き、得意滿面それを指導教授のところへ提出に行った頃のことである。論文を私の手から受取ったS教授はパラ〳〵と二、三度それを始めから終りまでめくると、そこにつゝ立ってゐる私を見上げ乍ら「君これは？」と云った。「何か……？」私はS教授の意を量りかねてゐると「君、これには參考書名が書いてないやうだね。」と教授。それでも私は自分の迂濶さに氣がつかず、不必要だと思ったから參考書名は省いた旨を答へると、教授は參考書名のない研究論文は全然無價値であるから、も一度それを附けて提出する様にと云って受理してくれなかった。この時私と同じ様に論文を參考書なしに書いた様に見せかけ、大家を氣どった生意氣學生は他にも尠なからずあったものと見へ、次のゼミナールの時間に皆んな散々S教授より油を絞られた。或る程その後注意して色々の研究論文を見てゐると、巻末或は章末に豊富な參考文献が並べてある。そしてそれが多ければ多い程權威ある研究であることも判った。これが私のきうしたことに関する開眼であった。

こゝで一寸理窟らしいものを云はせてもらはふなら、文化といふものはもと

もと継續的なものであってゲーテも云ふ如く、前走者のバトンを受け継いで走るリレーの様なものである。あの絢爛たるギリシヤ文明にしても自分獨りで出來上ったものではなく、その前走者として埃及、バビロニヤ及び波斯の文明を有つてゐたことは誰でも知ってゐるところである。つまりこれを參考書の問題に當嵌めると、澤山の良い參考書なしにはいゝ内容のあるものは出來ないと云ふことになる。この点澤山の人々が考へ違ひをしてゐるのではないかと思ふから、このページを借りて憎まれ口をたゝくことにした様な譯である。

東京大震災に藏書の殆どを焼いた大學教授が、參考書なしには教へることが出來ぬからと云って辞職したが、參考書に依存する様では困ったことだと云ふことから、センター内の參考書を澤山持つ人々を揶揄した如き一文をどこかで讀んだ。が、私は前に述べた様な理由からこの教授を本當の學者的良心を有つた人だと考へたい。この學者の專門は梵語であったとか云ふが、これは語學といふより印度古代思想特に婆羅門哲學研究そのものとさへ云ひ得るもので、參考文献なしにその講義をすることは實にとんでもないことなのである。よしこの教授が稗田阿禮の様に博覧強記の人であったとしても、參考箇所を示すことが出來ないとすればその講義は不親切極りないものだ。だから參考書が無くても書けると誇る人、或は參考書が全然ないから充分書けないと云ひつゝもさうしたものを書く人に、私はも一度ゲーテの言葉を引きたい。「眞によく走るもののみが前走者のバトンを受ける資格があるのだ」と。

人間は神化する

松原信雄

太初(ハジメ)に誰が人間を創生したのか、私は知らない。それを知りたいと思ふが、知ることはできない。宇宙の神秘と人生の謎を解くには、浅すぎる智慧と、無限の慾望の虜である人間は、自己慰安のために宗教を案出したが、その宗教家は私の疑問に對して、いとも易々と解答を與へてくれる。「宇宙と、そして天地に充ち満つ森羅萬象を創り給ふたのは神である。」と。

私はそれを否定しようとは思はない。然し、眞理を追求して飽くことを知らない科學者はまた異なつた説明をしてくれる。「科學的研究の結果、人間は下等動物から進化したものであることは、疑ひを容れる餘地がない。」と。

私はこの説にも敢て反對しない。だが、その下等動物を創生したのは誰だらうか？　古今東西の宗教・哲學・科學界の偉人連の叡智と冥想の産物や、深遠なる研究の結果發表された権威ある書物を探求しても、私の疑問を氷解して心に満足を與へてはくれない。

よし誰が人間を創造したにせよ、我々人間は生活の見えざる絲に曳かれて、徐々に進歩發展しつゝあるといふ事實こそ、否定することが出來ない「眞理」

ではないだらうか？。

果實や草木の葉根などの天然的産物を唯一の食物とし、猛獸の襲撃から身を護るために、樹上又は洞穴生活を續けて居た原始時代の人間が、火の使用を知ることに依つて魚類の味を覺え、次いで弓矢の發明と共に狩獵を習ひ、更に進んで動物の馴育と植物の栽培、又鉄鑛の熔解と共に鉄器の使用を學んで、漸次、野蠻から未開、文明へと發展して來たのであるが、其の社會形態も家族・種族・氏族を本位とする原始種族共同体から、奴隷制度、次いで封建制度、最後に近代資本主義制度へと変化ー發展ーを續けて今日に到つたのである。

日本ではその昔、紀伊の國、攝津の國など〳〵、宛も現代の獨立國家のやうに、それ〳〵獨立した政治的主權の下に社會生活を保持し、時には干戈を交へてきたが、社會の変化ー資本主義の萠芽發展はかゝる封建制を崩壞せしめて、同一民族を單一主權ー國家の下に統一してしまつた。併し、社會の変化は停止することを知らず、十八世紀末、機械の發明と共に英國に於て呱々の聲を擧げた資本主義もその發展の頂点を越えて、既に死期を迎へ、今や世界は新しい社會ー同一人種の共榮圈確立に向つて劇しい陣痛の苦しみをなめつゝある。

蓋しギリシヤの哲學者ヘラリツトの云つた如く、「萬物は流轉するのだ。」宇宙の凡ゆるものは、生成し、変化し、發展しそして消滅する。即ち萬物は動いてゐるのだ。常に変化しつゝあり、一瞬時も停止することを知らないのが、萬物の生きた姿である。なにものもこの辯證法的法則から免れることはできない。

幼年から少年、青年、壯年、老年といふ發展的過程を經て、最後に死に到る人間のやうに、生成、變化、發展、死滅が凡ゆる有機体の宿命的過程なのである。歴史は繰返すものでなく、變化するものである。

では、前述のやうな変化發展を續けて漸く同一人種共同体、若しくは大陸共同体の形成といふ段階にまで進んできた人類の明日はどうなるのであらうか？、

現代世界の諸國家が對立して交戰してゐるため、人々は或は歎び、或は憂ひ又歎き悲しんでゐるが、この戰爭こそ新しき世界、現代よりも更に高度なる文明社會を創生せんがための苦鬪であると、私は解したい。蓋し鬪ひは進歩の母であるからだ。

自己の生存と發展、他の者に對する優越といふ生物的本能と限りなき慾望の虜にされてゐる人間は、個人對個人、種族對種族、國家對國家といふやうに、その規模と範圍は擴大したが、戰ひを繰返してゐる。實に有史以来、人類の歴史は鬪爭の連續であつて、相愛互助を高唱する宗教の力を以てしても、人間相互の血腥い殺戮戰を絶滅させることはできなかつた。であるからとて、宗教が無力であるとはいへない。個人相互の殺傷行爲を嚴重な罰則を以て禁壓するだけの、理智と相互愛を有つてゐる人間は、無辜の民を大量的に殺傷する殘忍極まる非人道的行爲たる戰爭を憎惡し、それを回避するためには凡ゆる努力を盡すのである。であるにも拘らず、未だ人類社會から戰爭が絶滅しないのは、人間が殘忍であるからでもなければ亦、宗教が無力であるからでもなく、人間社

會全体、世界そのものが、斯かる段階に到達してゐないのだ。

一片の腐肉を中にして噛み合ふ狼と、「金が仇敵の世の中ぢやなあ！」と近松時代から慨歎されたやうに、金ー物質ーのため親子兄弟すら相爭ふのと、また、原料資源と商品市場、更に資本投資のために植民地を求めて國家と國家とが死鬪するのと、何れもその爭鬪の本質に於て異なるところはない。

食物が豐富にあれば狼は噛み合ふ必要はなく、肩を並べてゆつくり御馳走を賞味するであらう。金ー物財ーが充分あれば、親子が啀み合つたり、兄弟が親の遺産分配のために醜い爭議を惹き起したり、又、金錢の貸借のために親友が仲違ひするやうなことがなく、彼等は溫い愛情に包まれた睦しい關係を續けることができるであらう。そして資本主義的商品生産が人間社會の經濟原則たることを停止したならば、それと同時に帝國主義戰爭の必然性が消滅するのである。

人間社會の生産力の發展とそれに伴ふ人智の進歩向上は、必ずやこの地上に過去と現在の人類が夢想郷（ユートピア）とした經濟的・政治的・社會的自由平等の社會を賚し、人類は形而上的發展を目指して相愛互助の平和に惠まれた生活を享樂するであらう。その時こそ此の地上の樂園に於て、人類は彼等の理想と崇めた神に近い存在と化するであらう。

之は「痴人の夢」であらうか？　否、過去の歴史が豫告する人類社會の未來圖である。

（畢）

花柳徳八重さん

杵屋彌曽貴代事
さすが生

此間第二館府の中井さんが見えまして、今度グレンデールから花柳徳八重さんを當地へ招いて「慰安舞踊の夕」てのを催したいが、一つ唄つて呉れないかと云ふことでした。数年間三味線に合して聲を出した事もなかつたのでどうかと思ひましたが、私が羅府で音樂舞踊協會をやつて居つて、勘須磨さん、三春さん、緑香さん、三佐さん、それから徳八重さん、みんな良い知り合でもあり、目的がいゝので唄つて見る氣になり承諾しました。色々話を聞いて見ると、徳八重さんが前にヒラを訪問された時に、同地有志の奬めに依つて踊つた所が、非常な人氣、つまり大受けでありましたので、そんなに皆さんが悦こんで下さるならば、ポストンは近い所であるからこちらへもと云ふ考へをお持ちだから、必らず来て下さると云ふことでした。

快諾を得ていよ〳〵各ユニツト有志の後援で舞臺へ立つた所が　各館府を通じて當地始まつて以来の大人氣、数千の觀客があの通り悦ばれた有様を舞臺の上から見た私達は胸がつまつて涙ぐましくなりました。徳八重さんの満足され

た様子が満面に顕れて居りました。

徳八重さんは前後二回日本へ修業に行かれました。二度目には千九百三十九年に渡日して四十一年一月に歸米しました。此三ヶ年が最も熱心に勉強なさつた時で、其間附きゝりで御世話をなさつたお母さんも、大低の事ではなかつたと思ひます。何しろ一日の中に花柳徳太郎さんへ二回、花柳壽三郎さんへ一回、杵屋佐次郎さんへ三味線のお稽古に一回、其外常磐津八百八さん、小唄の某さんへと云ふわけですから聞いた丈けでも想像が出来ます。

其精進苦業をなさつた結果は云はずもがなです。此間の舞踊を御覧なされた皆様にはなる程とうなづかれる事と思います。

「ポストン文藝」から踊について何かお話をと云つて御願ひして見ましたが、徳八重さん曰くです。自分は子供相手の稽古なら兎も角雑誌などに書いていただく様な事は持ち合せがないと、あつさり逃げ様となさるので閉口しましたが、それでもやつとつかまへることが出来たのが左の通りです。

花柳の先祖は西川仙藏さんですが、西川流は五代まで榮へ殊に四代目の扇藏さんは最も名高い人でした。此の四代目の門から花柳壽輔さんが傑出して、花柳流を創起して今日に至つたので、千六百六十年頃から始まつたわけです。

踊の事ですが、踊には舞（マヒ）、踊（オドリ）、料（リヤウ）と三つの要素があります。舞はお能の仕舞から来たもので、北州や松の緑で御覧になる通りです。これなどは素踊りであ

ますが、歌舞伎風な踊の中にもかなりはいつて居ります。

踊ですが、おどりは拍子に合せて、心の儘に動いたのが源で、其れが國々の盆踊となり、田植踊となり、歌舞伎踊となりましたが、此の場合の踊には科がない。つまり意味がないわけです。元録花見踊の惣踊り見た様なものです。

科は物眞似の所作であります。舞も踊も惣眞似がありますが、此科はもつと寫實的なので、例へば酒を呑む「振り」、よつた振りと云ふ様な所作であります。

それから外に大切なのは「間」です。間は拍子で、律であります。長唄の囃子の方でも、之をトツタンと云ひまして　ハ1ツ2ハ3イ4ア・5ホ6ツ7ホ8トツタンと云ふ八拍子は、どんな唄にも合ふと云ひます。普通踊は此れに乗つて行けば宜しいのですが、優れた藝を持つ人は時に此拍子から逃げると云ふことがあります。三味線を定間にひかせておいて踊丈けが律から逃げるので、かう云ふ事がほんとうに踊に味をつけることになります。

姿勢は踊の眼目で、腰のいれ方、首や目の使ひ方、手足の動き等中々めんどふですが、つまりは動きに依る形の美しさであります。

日本の踊で最も忌みきらふ事は、「ナンバ」と云ひます。之もやはり姿勢の事ですが、右の足を出す時に右の肩が前に出れば、これがナンバです。左の足が出る時に左の肩が前へ出てはいけません。つまり引くべきを出すことです。兎も角足の動きには非常な注意がいります。

唄でも三味線でも踊でも、数ばかり有つても何にもなりません。数多く知ら

なくとも、一振一節を十分納得してゆくのが肝要です。
踊は六つかしい理屈がなく拍子に合せて、心の儘に動いてゆったりとはこんで行く、之が踊の「心（シン）」になるものです。
六代目が踊は誰にでもやれる、と云ったさうですが、無理な形や、無理な動作をする事なく、自然に運ぶと云ふ事が凡てゞあるそうです。
大体こんなやうな事を云はれましたが、實際踊を見る人は多いが知って見る人は少ない。知って見る人は勿論あるが、味って見る人は極めて稀です。而し以上徳八重さんの云はれた御話丈けでも心得て置いたならば、舞踊を見ると云ふ事に大いに助けになると思います。
重ねて云ひますが一寸した短い間に、三館府ぶつ通しに出演して、少しも疲れた様子もなく、多くの民衆に慰安を與へた悦びに満足なされた徳八重さんの態度を見た私は感概無量、ほんとうに嬉しくたのもしく思ひました。
幸福でなければならない花柳徳八重さんの前途を祝福して筆を止めます。
何十年故郷の親にさへ妻の代書ですまして、全く日本字の手紙をかいたこともない私に、文藝の有田さんから徳八重さんのことを書けと電話された時にはほんとうに困ってしまいましたが、扨て頼まれるといやと云ふことの出来ない悪い癖があるので引受けました。時間はないが書かずには居られないと云ふので出来たのがこんなものです。徳八重さんには御勘辯を願ひ、又本誌愛讀者諸賢に其おつもりで御覧を願ひます。（四五、六、十七）

ポストン生活印象（十）

四十四年度

貴家志ま子

四十三年の秋になつて、ツーリレーキへの隔離が終了し、その後の部落の行事には、外面上取立てる程の特種の事柄もなくして、住民一般の生活は平靜に歸した。年末になると、前年の如く各部落へ配給された糯米に、猶少しづゝ共同で買ひ整へた糯米を加へたりして搗きあげた餅は、前年に比し立派な出來上りであつた。二回目の元日は同胞一般の心もかなりに落付き、多少に依らず緩やかな氣分の出た二回目の元旦のテーブルに竝んだ馳走も、前年よりは念入りに作られ、その品數も多いことは他の部落も同一であつたらうと思はれたのであつた。

この年の一月中記憶に深かつたものは、赤十字を通して日本よりの慰問品が交換船グリツプシヨルム號で同胞の手許へ届いたことである。故國同胞の眞心をこめて贈られた品物は、藥品、味噌、醬油、緑茶等であつた。さてその分配になると當事者は相當頭を惱まされたのである。といふのは、一世と二世との別、獨身の人や家族を持つた人など、それ〳〵境遇の異なつた人々があつたからである。此の慰問品分配に就いては故國の人々が想像だも及ばないやうな珍

論が現はれたのであった。私の部落では一世二世の別なくすべての居住民に夫々、醤油は約一パイント宛、茶は半斤宛を分配し、味噌は個人には分配せず、食堂用として、美味しい味噌汁が作られたのであった。兎に角これらを頂戴した全同胞は恐縮と有難さ、又懐しさ、喜びなどが漲り溢れたのであった。後になって書籍も到着し、これは圖書室に備へて一般の回覧に供された。この月には日本歸國を申請した人々の調べや、日系兵徴集令問題にからんで、思想上に関する一つの事件が突發したが、無事解決を見た。

この轉住所が後日、或は自給自足態勢をとらなければならないかも知れないといふ場合を考慮した市参事會は、その態勢確立には現在の人口に對して、八千英加の土地を開拓しなければならないといふ實際問題があり、その準備的工作の一つとして、轉住所に残りたい人及び外部移住を望む人の調査が行はれた。

猶七月には日本人所有の土地法問題が起った。加州の方で戦爭を好機として、土地法違犯となるやうな、さまざまの証據を蒐集することに專ら努めてゐるが、完全な証據が思ふやうに得られない為に、色々なツリックをしたり或は欺したりして、其の當事者に聊かなりとも不利なることを云はせやうと企む者が、他の轉住所に行って居るといふ情報が、ある筋より齎らされたのであった。であるから、その卑劣な手段に晦まされて、僅の過失を穿鑿され、それを先方に取り上げられては誠に遺憾至極であるから、それを未然に防止するため、所内法律家を頼んで先方と交渉したり、又その善後策を講ずるため、當事者及びその

関係者達の會合が再三催されたのであつた。

土地法違犯の廉で告訴された同胞等のことは、其の當時の新聞にも報道され、且つこの違犯者摘發に関し、マイヤー司長の告示もあつたのである。

住民の外部就働　再轉住、日系兵の入隊などにより、各部門に就働員の不足を來し、日白立法行政両機関聯合の「勞力委員會」が設置されて、その善後策を講じたりした。九月に入つて、食堂合同問題が起り、色々協議するに當つて意見の一致を見るに至らず、相當難儀したといふ當事者の話に依ると、生活の裏面にまで及んだとのことである。

前線で戰死したポストン出身の二世兵の數が十三人に上り、これ等戰死者の追悼會が十二月三日、部落四のステージで擧行された。これは西部沿岸防衛軍司令官よりの要求に基いたのであつて、當日午後二時第一キャンプの入口から行列が初まり、先頭には一九九五聯隊の兵士十數名、次いで在鄉軍人會、U.S.O父兄會、宗教聯盟、ガール及びボーイ・スカウト、Y.W.C.A、及び其他公共團体といふ順序で式場に入場、三四名のスピーチがあり、式は極めて嚴肅に執り行はれたが、寂しく色々なことを思はせられたのであつた。

十二月十七日午後二時より高校講堂に於て、立退除外令撤廢に就き所長のスピーチ及び報告があり、次いで轉住司長及び西部防衛軍司令官の全般的立退除外令撤廢に関する告示が發表された。それに依つて居住民は相當ショックを受けた事は事實であるが、人々の氣持は入所當時とは余程変つてゐたので、同胞は沈着冷靜に構へて動揺の色を見せなかつた。

入所當時を回顧すれば、こんな沙漠に住むよりは牢獄に居た方が増しだとかこゝは娑婆に對する地獄であるとか云った程に、嫌悪され悲觀視されたり、又屈辱的な寄生生活を政府に依って強制された事を憤慨したりして、ともかく凡ての人から嫌悪された轉住所生活も、捨鉢的な諦めや又は國民的自覺に伴ふ、「大悟徹底」などが手傳って、人々は時日の経過と共に、此處の生活にも馴れて来たのであった。物事に馴れるといふ事は、時には良いことであり、又或場合は恐ろしい事である。入所以来二ヶ年半、この間不自由ながらも、集團生活としての諸般の機構は漸時に少しづゝ整ひ来るに及び、前書の理由と相俟って追々住みよくなったのである。この時に當り加州は開放され、轉住所閉鎖が發表されたのである。さて、退去令は解除されたが、諸種の障害の為に外部移住の叶はざる住民は相當あるから、W.R.Aはそれらの人々の為又一つの方針を立てなければならないであらうと云ふのが、轉住所住民一般の觀測である。

附記

前號の「ポストン生活印象」の中のアイオンウードの原名に就いて或人が私に書状を寄せられたが、あれは辞書から探し得たものである。

惟ふに他の樹にもアイオンウードと俗稱されてゐたものが有ったと見るべきか。書を寄せられた人は、ポストンの山に生えてゐるアイオンウードに關しては深く研究されてゐられるらしいので、これは一般の人等の智識上に肝要な事柄であるとともに、學術的資料として最も有益になるのであるから、その方面から委しく説明していたゞくことを切に希望する次第である。

寶石の話（四）

新関惣太郎

古代天文學

と寶石の話も亦、忽（ユルガセ）にならぬ関係があります。由來天文學の起源はバビロニヤから出發して居るのでありますが、此の國の祭司達が職業上、其の祭日の日誌を記け初めた事から初まりまして、遂に天体の觀測迄もするやうになったのだと申されて居ります。そして之が畧ぼ完成して一つの學問として組織立ったのは、紀元前約三千年即ち今から五千年も前の事であります。此のバビロンの天文學では、黄道の一週を十二宮に分けて居ります。支那の方は御承知の通り十干十二支を以て表現し、之に陰陽あり、又バビロンの方にも「寒暖」の二種ありまして、十二種の寶石を以って當て嵌めて居ります。即ち十二種の寶石の名を擧げますと、一、水瓶 Onyx or Crystal、二、双魚 Coral or Amber. 三、白羊 Ancethyst or Bloodstone 四、牡牛 Emeraldo or Carnerian 五、双子 Aquamarine Hematite 六、蟹座 Pearl Moonstone 七、獅子 Ruby Jade 八、乙女 Tourmaline Beryl 九、天秤 Sapphire Opal 十、天蝎 Agate Malaohite 十一、人馬 Lupis ~ Lazuli 十二、磨羯 Turquoise, Garnet と云ふ事になります

が、此の寶石の赤や黄色のものは暖に屬し、無色又は緑色のものは凡て寒に屬するのであります。そうして之等寒暖の寶石に觸れる事に依つて、不思議な魔力や、醫療の効果がある斗りでなく、吾々人間の一生と運命とを支配して居る大切なる役割を持つものであると信ぜられて居りました。

ヨーロッパ

に於ける之等の思想は二ツの大いなる流となつて表はれて居ります。一つはエヂプトを本源として「死後の生命」と云ふ事を專らにし、もう一つは、バビロンを源とした「安全なる渡世」と云ふ事であります。それで凡ての人間が、その生れた月の十二宮に型つた寶石を持つ事は、一切の不安と危險から免がれて、無病息災長壽を保つ事が出來ると信ぜられてゐたのであります。又一方星ト學者はバビロニヤ天文學の黄道一周論に結びつけて「人間の運命はその誕生當時の太陽に負ふ處、甚大なり」と解釋したのであります。

實際に於て科學の進歩した今日、以前荒唐無稽と思はれた事でも、此の寶石を透して來る光線の人体に及ぼす不可思議の力は、肉体的にも精神的にも決して等閑になし得ないものであると申して居ります。殊に、

ラジユーム

の發見以來一層此の方面に確証を與へ、今迄寶石と云ふものは只一種の鑛物に過ぎないもので、全然生命なき死物、即ち活動力なきものとして、生命ある他のものと明白に區別されて居つたものであります。處が最近此の寶石を組織するアトームは、生命あるものと同じやうに常に

「震動」して居るものであると云ふ事が判つて来たのであります。

中世紀に於ける寶石師は科學者であり、又藥劑師でなければならなかつたが、將来の寶石商は多分精神分析學、星ト學、數學、及び鑛物學に秀でたものでなければならぬかも知れません。例へば、諸君が若し自分の「幸運の寶石」を需めらるゝとすれば、寶石商は直に寶石の各震動數に依つて、其威力を確かめ、次に諸君の誕生年月を尋ねて、色彩のチャートと照し合せ、そして諸氏の肉体及精神に最も適合したものを推薦するに異ひない。かくする事に依つて初めて、寶石と云ふものゝ價値も増大する譯でありますが、同時にその寶石が諸君の將來に於ても、最も力ある助力となつて活きて働くものであると考へられます。

それから一説には、此のバビロンの天文學をアラビヤ人が受継いで十五世紀の頃、ヨーロッパに傳へ、同時に此の寶石を土臺として、今日の誕生月寶石のアイデアを與へたものであると申して居ります。

聖書と寶石

も仲々面白い関係を持つて居ります。今其中より幾分を申し上げて見たいと思ひます。

先づ第一に創世記の第二章を見ますと、エデンの園の郊外ハビアは黄金の外、實に夥しい寶石の産地でありました。「ブドラクと碧玉彼處に在り。」と申して居ります。又黙示録の第廿一章を見ましても、「新しき神の都、聖なるエルサレムは純金の敷石（シキイシ）を張り詰めた街路と、透き通る水晶の如き水の流るゝ川の市街でシヤヌパー（寶石）の土臺の上に、目も眩る斗りの數々の寶石を以て石垣を作

つてある。」と記されてあります。かくの如く、聖書は第一巻の初めから最後の黙示録に至る六十六巻中に、一千七百四回の寶石や鑛物の引照がありまして、百廿四個の異つたヘブル語やグリーキの名前が擧げられて居るのであります。

思ふに神の園エデンは幾多の寶石の産地でありました事は、豫言者エゼキエルの証明して居る處であります。又第二巻「出エヂプト記」に參りますと、祭司長の胸當なるものがありますが、それには驚くべき數々の寶石が黄金のふちに嵌められて居ります。

エデンの園

は一体何處にあるかと云ふ事は仲々面白いと存じます。一説に印度のセーロン島説があります。此處の住民は皆寶石の飾の付いた衣服初め持物は勿論、何から何まで悉く寶石盡しであります。それもその筈、此の嶋は到る處寶石が澤山ありまして、滾々と流るゝ川の中にも其川原にも大自然が自ら磨いた色々の寶石が、目に映ゆい斗りに光つて居るのであります。又緩やかに傾いた山の裾には香り高い香料の木が繁茂し、其間にオレンヂの花葡萄の樹、枝は天に聳ゆるシユロの大木には無數のデーツが實つて、其處此處に無花果の樹もあれば、名の知れぬ熱帶植物の實も價なしに人々を待つて居る。木々の間には小鳥や野鳩は群を為し、平地には主なき孔雀も遊んで居れば、鹿も走つて居る。山には色々の鑛物、野には衣服の資料たる亜麻等も無限に生へて居る。此の嶋の住民は期せずしてエデンの園は此のセーロン嶋であると固く信じて居るのであります。

第二の場所はアフガニスタンのパミール高原であります。之は多分人類學者や考古學者の「人類發祥の地は中央アジアの高原」であつたらうと云ふ學説から生れたものと、又一方聖書の中にある物語のエデンの園は四つの川の源であつて、世界の四隅に流れる處であると云ふ見解から来てゐるのであると思ひます。

第三の場所は最も多くの人々に依つて信ぜられて居るメソポタミヤの豊饒なる土地であります。三日月形の平坦なる此の土地はユフラテ川とテグリス川の両方から灌漑の地であると信ぜられて居ります。今から約五千年前には、既にスメリヤン文明の絶頂に達して居つたと歴史家は申して居ります。

此のスメリア人は元來牧畜と農耕の民でありまして、織物や灌漑事業を創始した人民であります。又美術や文藝の方面にも長足の進歩を齎した民でありまして、金に珊瑚や瑪瑙及び眞珠貝にウルと云ふ町から持つて來たラピス ラズーレと云ふ寶石で巧に象嵌模様等をした幾多の裝身具や器物が、今も古墳の中から發見されるので判ります。

又彼等の習慣として高貴の方の亡くなつた時には、其の使はれて居つた從僕共は「殉死」として其の主人の墓に生きながら葬られたのでありますが、之等の習慣を我日本の古代風習に照して見ますと面白い共通の点があるのであります。

數年前、考古學者の一行が學術研究の爲めに此のカルデヤのウル(之即ちユダヤ人の始祖アバラハムの故郷ー創世記十一章三十一節)にある一つの廢墟を發掘したのでありましたが、丁度十個の骸骨を見出したのであります。何れも

ウラ若い女性のものでありました。それが即ち今から約五千年も前のもので、人々から忘れられて居ったシヤブ・アド女王の墓であったのであります。此の若い美しい女王の死に依って九名の同じ年頃の若い女官達が殉死したのでありますが、其の内の一人は音樂師であったと見えて、健げにも亡き主人を慰むる爲めに、生の限り琴を彈じて居った有樣がハッキリと顯はれて居ったのであります。琴は銀製の軌形で、先の細くなった處に小牛の飾が付いて、琴全体に美しいラピス・ラズーレの寶石を以て象嵌模樣が出來上り、少しも破損せずに完全に殘って居ったものであります。學者連の説では、現在世界に殘ってゐる琴の中、之が恐らく一番古いものであらうと申して居ります。

此のスメリアン文明は直接バビロニヤに受継がれ、それが轉て古代天文學の創設ともなった事は前に申し上げたやうな次第であります。面白い事には此のバビロンの人々は、神の聖き園には色々の寶石の實る一本の杉の木がありまして、それをハンバツバと云ふ剛力無双の王樣が常に守って居ると云ひ傳へられて居ります。そして前記ラピス・ラズーレと云ふ藍色の寶石は皆下の枝の先になるものであると信じられて居りました。

寶石類が木に實るものであると云ふ思想は單に此のバビロニヤ斗りでなく、印度は勿論ヨーロッパ地方にもありますので、初めは白の寶石が太陽の光線に依って熟し、時を経るに從って次第に黄、赤にと変化して最後にルビーになると考へて居りました。

殉教物語

恒吉盛花

此のお話は、K先生の十八番だと申し上げると、同先生に對して甚だ相すまぬ氣もしますが、何度聞いても目のうるむ話であり、私もその昔味噌擂り小僧時代に、幾度も師の旁から聞かされた話ですから、うろ覺えを其のまゝ綴つて見る事にしました。

× ×

豊臣秀吉が坊主の密探を使つて、薩摩に攻め入つてから後は、佛法嚴禁の法度が薩摩に布かれた。そしてこの法度を犯した者は死刑に處せられて來たのだ。だが何れの宗教を問はず、押へられ禁じられると、その信仰は益々燃えて内部へ内部へと深まつて行くものである。

信仰を失ふ事は生命の糧を失ふ事であつて、佛法禁止も何のそのと、或時は山間に穴を堀つて佛法を談じ、或時は木樵に化けて山に集合して彌陀の名號を唱へ、家の柱の中に隱し佛壇を設けては御佛を禮拜したと云ふ事である。

× ×

時は寛政の頃、青木清助と云ふ藩士の娘に千代と呼ぶ娘があつた。何うした因緣からか彼娘は嚴しい法度の念佛宗に、心底から歸依して居た。

彼娘にはこれと云ふ程の學問は無かつたけれど、彌陀の御慈悲に依つて大誓願が建立されて居る事を聞かされる度毎に、感受性の強い彼娘の心中には深い歡喜が明王の様に、圓らかに培かはれて行つた。人間は罪障の多き者だと聞かさるれば尚更に佛の慈悲が有難く、況してや女人は五障三從の身であるにも拘らず、女人救済の悲願あると聞くに及んで、彼娘の心は感謝と歡喜に滿ちるのであつた。「彌陀の本願は老少善悪を選ばず、只信心を要とすと知るべし。」

親鸞聖人の、この御教示の御恩の程を思ふと、何とかして一度は京都に上り、御尊影に泌みぐと御禮を申し上げたいと云ふ念願が、彼娘の胸に絶えなかつた。

然し念佛を口に稱へる事さへも許されぬ薩摩の國から、御本山に參詣するなどは思ひも寄らぬ事である。況してや女人の身では。然しながら陽氣の發する處金石亦透る例への如く、一念止み難き願望は、彼娘をして京都見物と云ふ名目で、二三人の同行者と共に京都への旅に立つべく決心をなさしめた。

急ぎの旅を續けて漸く御本山にたどり着いた彼娘は、只懷しさ嬉しさに感謝して、お念佛もろ共に祖師の御尊影に御禮を申し上げ、報謝の念を一層深くしたのでした。

歸國の後は益々念佛一向に勵み、佛様の慈悲に浴した日暮しが續いたが、ふとした事から御本山參詣の事が露見して、彼娘は役人に捕はれの身となつた。

時の奉行役は血あり涙ある情の人であつた。何とかして此のうら若い千代女を助けてやりたい。末長い生命を無残に刑場にさらすに忍びないと思ひ、誘導訊問に依つて、彼女を救はんと試みましたが、千代女は眞實の答をしたのでした。

「千代！そちは伊勢参宮に行つたと、聞いたがさうであらう？」
「いゝえ！妾は御本尊に参り、聖人の御尊影を拜して歸りました。」
「見物のついでに参詣して来たのだらうから、今後は掟にふれる事の無い様に氣を付けて、勿論念佛などは口に稱へぬであらうな。」
情け深い奉行は、「ハイ、有難うございます。」と只一言だけ彼娘が答へてくるればそれでよい。然うすれば此のいぢらしい娘は救はれるのだ、と思ふてその答を待つて居られた。
それだのに、千代女は何うしても、偽を答へる事が出来なかつた。
「一度聖人の御尊影に接したいのが私の念願でございました。見物も何もせずに直ぐに歸つて参りました。稱名念佛は私の生命でありますれば、彌陀の本願に依つて生かして戴いてこそ、人の世に生を受けた所詮もあると思ひます。」
奉行の情をかけた一縷の綱は切れて、断罪の宣告が残るばかりであつた。千代女は死を恐ろしくは思はなかつた。一切合切を如来の大弘誓願に棄托して居る此の身である。罪障多き此の五尺の体をぬぎ捨てる時が来たのだ。尊い御教なくては生き甲斐は無いのに、假にも如来の法を忘れるなどとは云へなかつた。限りなき御慈悲を偽つてまで生きなければならぬ理由は、彼娘には全くなかつたのだ。
稱名念佛もろともに、にこやかに彼娘が刑場の露と消えたのは、それから間もなくであつた。

× ×

想隨 緑蔭に綴る

外川明

4

額に群がる蟆子を掃ひ除けながら、伸びたデヴイルグラスを、チヨキ〳〵と鋏で刈つてゐると、夭折した詩人八木重吉の詩をまた想ひ出す。

くさを　とつてゐれば
あたりが　あかるくなつてくる
くさを　とつてゐれば
くさをとつてゐるだけになつてくる

詩も歌も一切忘れてゐる境地そのものが詩であると云ふことを教へてくれる。

5

『人間に拳骨がある限り、喧嘩と戰爭は絶えないのだ』と、バーナード・シヨウ翁は慷慨してゐる。『歴史は繰り返す』とは昔から謂はれて来た言葉だ。然し、私は信じたい。如何に人類が血みどろになつて戰爭しても、夜空に星が輝く限り、宗教も藝術も滅亡してはしまはないといふことを。

6

瓢箪の種、へちまの種、夕顔の種等、今年もまた送って欲しいと一人の友はユタ州から手紙をよこした。去年コロラド州にゐた彼は、次の年に蒔くべき種子を採ることも忘れて、飄々として他州へ移って行ったのである。

そしてもう一人の、謡曲を一緒に稽古してゐる所内(ここ)の友は、私の方ではすっかり忘れてゐたのに、『はい去年のお約束』と云って深切叮嚀にも夕顔の種を持って来てくれた。

私は、この正反對の如うに見える二人の友の両方の性格に、同じ捨て難い友情を感じてゐる。

7

遠いトパスのセンターから、未知の友が次から次へ良書を送って貸してくれる。有難いことである。荻原井泉水師の『芭蕉と一茶』は特別にも良かった。

火の字に寢て涼しさよ淋しさよ。　一茶

下下の下下下下の下國の涼しさよ。　一茶

涼しさを我宿にしてねまるなり。　芭蕉

涼しさや鐘をはなるゝかねの聲。　蕪村

井泉師の選んだ一茶と芭蕉の句に、更に蕪村の句を加へて、異った境地の涼しさを味はって見る。

若葉傳ひの夕風が、南向きの窓から涼しく流れ込んで来る……

久しぶりに琴と尺八の合奏を聽いた。――六段――黒髪――千鳥――等、東洋音樂のいみじさが心身に泌み渡る。殊に尺八の思出が私の涙腺をつゝく。かうしてこの三人の友達は、入所してからスタートした尺八を、僅か三年足らずの年月の間に、良き師匠の導きによつてこゝまで精進させたのである。

何を學ぶにも、最も大切なことは、良師を得て正式な道を踏まなければならないといふことを痛切に感じさせられた。

山奥の農村なるが故に、適當な師匠もなかつたので、私の尺八はものにならなかつたが、十八九歳の頃の私は獨りで毎晩吹いたものだ。眞實うに泣く程好きだつた。その若い時代に良き師匠に就くことが出來たなら、私にもかうして他の樂器に合はせて吹く事も出來たであらうと思へば、今更惜しくなつて来る。

これから新しく始めやうとも思はないが、良い笛が手に入つたら、吹かなくもよいから持つてゐたいやうな氣がする。笛を愛し、笛を常に身に着けてゐるといふことは、ゆかしいことであると想ふ。

昔から笛に就いての物語りは無數にあるけれど、『青葉の笛』を最後まで身に着けてゐた義盛の物語りは、餘りにも美しくもまた痛はしいではないか。

暗夜の笛の音に誘ひ出されて、敵の伏兵の銃丸を身に受け、遂にそれが死因

となつたと云ふ。武田信玄の物語りもある。靜かなること林の如く、動かざること山の如き、豪膽智謀の名將信玄でさへ笛の音の誘惑には負けたのである。

9

不惑といふ年齢に達しても、私の涙もろさは治らない。血液の循環の工合だとも想つてゐるが、病氣なら病氣でもいゝ。涙を心の手の珠数にして生きてゆきたいと憶ふ。

近日中に、子供の教育の爲に餘儀なく出所すると云ふ、アートスクールの板谷さんと路傍で立話をした。彼の話すところによると、岩永牧師の涙は出初めたら一日でも二日でも續く時があるさうだ。そしてその滾々として湧いて來る涙を、良い方向に利用しやうと思付き、感激の涙の湧いて來る間、ペンを走らせることにしたさうである。が、一度、一番長い手紙を友人に書いたのは、九十頁とかあつたと云ふ。隨分変つた人もあればあつたものである。同師が雅號に「天涙」を用ひてゐるのも、かうしたことに起因してゐるのであらう。

それにしても、何事にも上には上があるものである。

10

逢ふ度毎、ポストン文藝に元氣をつけてくれた板谷さんも出所した。本誌の産みの親であり育ての親であつた人々、矢形溪山、石川凡才、片山幽子、富田虎山等の諸兄姉も四散してしまつた。想へば感慨無量である。

漢詩と吟詠に就いて（一）

鈴木胡仙

詩は文化の最も根本的なものが之によつて作られてゐる。古代に於て文學とは詩であつた。詩の外に何ものもない。支那には詩經がある。詩三百、主として周代の詩を孔子の手によつて集錄されたものである。

詩は赤裸々である。此處には人間の本能的な眞情が、有のまゝに表現されてゐる。詩の特徴は、偽らざる人間性の發露である。詩は人心に觸れる。心靈の琴線によつて打ち振ふ。生命を呼び起し心靈を呼び醒すのが詩の本質とその職分であらう。

漢詩文の源とその發達＝日本文化建設の基礎として所産を見た漢詩が時期その宜しきを得て、儒教の發展と共に、奈良朝時代に於ける文化精神の伴侶として益々發達した。淡海帝（天智天皇）の朝に於て學校を起され、更に天武天皇の御宇には學制を定められて、京都に大學を興し、諸國に國學を設けられてより、漢詩文の進歩は實に盛んになつた。淡海帝の御宇（一三二八年）に皇太子、大友皇子は、帝の御宴に侍し、天皇の德を頌して

皇明光二日月一。帝德載二天地一。三歳竝秦昌。萬國表二臣義一。

と詠まれた。邦人作詩の元祖として、又日本精神作興、思想善導を提唱されたものである。爾来漢詩文の攻究益々隆盛となり、帝の第二皇子、河島皇子も亦帝德を頌した。

塵外年光滿。林間物候明。風月澄遊膚。桂松期交情。

と詠まれた。然るに持統天皇に至り、國語に綴つて詔勅とされたが、此の時代の漢詩は、吟ずることなく單に朗讀さるゝのみに過ぎなかつた。而して桓武天皇(一四六一年)に至り漢詩文學は愈々隆盛になつた。

平安朝時代(一四七〇年)には奈良朝末期の趨勢を承け、詩文の隆興更に増した。殊に嵯峨天皇(一四七〇年)は優秀なる聖作を留め給ひ、皇女有智子内親王は當代女流第一人者におはして、彼の有名な『春日山莊』は親王十七歳の時、即ち弘仁元年加茂の齊院となられての作詩である。

寂寂幽莊山樹裏　仙輿一降一池塘　棲林孤鳥識春澤　隱澗寒花見日光
泉聲近報初雷響　山色高晴暮雨行　從是更知恩顧渥　生涯何以答穹蒼

爾来歷代の天皇は一層詩文を愛好せられた。空海、小野篁、菅原是善、都良香等の學者を出し、當代の詩壇に曙光を與えた。

承平、天慶の乱治つて世は再び太平となり、漢詩文學が更に隆盛となつた。「古今」「後撰」「拾遺」集等が顯はれ、一六二七年には和漢朗詠集、三十六撰等の著書が出來た。此の平安朝時代の初期に於て、神樂(カグラ)歌、催馬樂歌などが歌はれ、後に朗吟、今様などが行はれた。朗吟は、詩賦中の佳句を和譯して俗謠風の譜

節で謠ひ、之を基調として古歌を吟ずるやうになつた。

仰々、朗吟といふものは、神樂歌、催馬樂歌を主題として、その外「今樣」の如きは、弘法大師の和讃によつて始まつたものである。漢詩文も藤原氏を中心に研究されたが、藤原氏の衰運と共に朗吟も殆んどその影を沒した。

室町時代の漢詩の衰運＝爾來歌論の勃興によりて研究の盛んなりし漢詩文も漸次衰へ、一般に漢籍を講ずるものなく、武人の間には之を讀み得るものすら、殆んどなかつた。然るに朱子學の傳來と共に一道の曙光が現はれた。惟ふに漢詩文學の發達は時代の變遷によつて盛衰を江戸時代に移し、朗讀を以つて終始したに過ぎなかつた。

江戸時代の趨勢＝治世三百年の江戸幕府は文物大いに興り、殊に賴山陽出でて、吟詠の風格を研究した。此の研究の半に豊後の廣瀨淡窓が熟生戒諭の意味を以て吟詠を研究し、之を熟生に吟じさせて修養に資してゐた。此所に山陽は詞文客中の交より淡窓の熟舍を訪れて其の研究指導を受けた。淡窓の熟舍は咸宜園と稱し、一代の門人實に三千餘人に及んだといふ。

宜園調と山陽流＝淡窓の研究と共に山陽流の吟詠が生れた。宜園調はよく田園詩人の妙境を表はしたものである。山陽流詩吟は別段それを擴めたのではないが、天下を周遊して到る所に諷詠して山陽流を成したのである。

朗吟の生命と研究の原理＝我國の文學史によつて知る如く、和歌、俳句、近代の詩、漢詩等は歌つて感情を現はすものである。そこで歌ふといふ事は國語

上よりいへば、大方（訴ふ）といふことから出發したらしいが、自然の大なる風景に接したり、種々の人事の出來事に遭遇したり、その他様々な感動を心に感ずる。その感じたまゝを心に蓄へないで、これを其のまゝ言ひ現はして、他人に訴へやうとする、それが即ち歌の心である。そして其の感動を受けるに至つて前後の事情を回想して細かに説明するのでなく、只感情の熱したまゝを訴へるのである。この意味に於て朗吟は、その感情をそのまゝ現はすことはいふまでもなく、詩にせよ、歌にせよ、豪壯と悲壯とを分類して、その感情を熱したまゝ訴へるのである。そこに初めて詩歌の妙味即ち生命が現れて來る。故に音韻について言へば、聲音はもとより、吾人の思想を現はしたものが言葉であつて、言語といふものは、場所により時代に應じて変化する。つまり言語の変遷は音韻の変化であり思想の変化である。

詩吟は人格培養＝流轉の甚だしい世の中に立つて、善と悪、徳と不徳の爭ひより起る凡ての原由を究明し、善が悪を克服し、徳が不徳を支配する。精神的教育が文化民族の特徴であると共に、文化精神より甦生し、茲に再び精神を練磨して身心の修養をするのが我が民族の特性である。漢詩文が音聲を以て律を作るはその生命で、純眞なる國民の精神を磨く上に、詩の感化力は大なるものがある。民族精神を象徴し、一意至誠の念を養ひ情操陶冶に基ける朗吟の研究が、一として人格培養、即ち修養の目的である。（つゞく）

ポストン文藝の回顧

矢形溪山

薪を擔ふて翠岑を下る
翠岑道平ならず
時に憩ふ老松の下
靜に聞く春禽の聲

良寛

この平和な詩情に富める祖國の春も、今は都市數百萬無辜の市民は敵の爆撃下に曝されて、爛漫たる櫻花を訪ふ人もなく散り果てた事でせう。

ポストンの自然は鈞するにコロラド河あり、登るに山嶽を廻らしてゐながら、斷ち得ない懊惱の續くまゝに春の逝つた事でありませう。

此間に、沙漠のオアシスの様に、月毎欠かさない「ポストン文藝」の發行は、せめて吾々にとりて精神的に救はれる多くのものがある事を偲ふて、献身的な努力を續けられる同人諸士に大きな感謝を捧げるものであります。頃日主幹松原信雄氏より七月號に、「ポストン文藝」の思出寄稿を依囑され、多忙を口にして否むべくもあらず、記憶を辿るまゝ禿筆を呵して其の責を塞ぐ事に致します。

不思議な邂逅

千九百四十二年五月二十七日、羅府立退きの殿として軍隊に警戒されつゝ、困憊の身をポストンの荒野に落ちつけた時、膝を没する塵埃の中を押し分けて、「オヽ溪山来たか。」と感涙の握手をした一友があった。これなん元羅府つばめ吟社同人今ツーリレーキで交換船の夢を描きつゝ待機して居る石川凡才其人でありました。

實に此の不思議な會合が今の「ポストン文藝」を生んだ動機になりました。

其の時！沙漠の中

木一本ないセーヂ原のバラックは、室内百十五度より廿度に昇る。屋根を剝ぎ取る砂嵐に乾き切った咽喉を濕す為めの水は、片っ端から病人の續出を早めた。

鑵詰のソーセーヂ、サワクラウトは日々續くメスのメニューであったが不平を云ふ氣力もなかった。

何とか精神の糧を求めねばーと、二人手を携へて當時のリクリエーション課長ジョン・パウエル氏を訪ねました。

幸に好意ある援助の下に、氏の管轄下に、ポストン・ポエトリークラブなる獨立せる團体を組織して繁雑なる教育課よりの羈絆を脱し、尚轉住所長ヘッド氏を訪づれて事情を具申し、飜譯（英文に）省略の下に刊行物發行の許可を得ました。

恐らく「ポストン文藝協會」は各センター中の先驅者であり、尚爾来今日に至るまで一回の休刊なく續行せられ

て居る事は慥かに異数であり、特に過去一ヶ年間に内容外觀共に一文藝誌としての貫録を示されたる点に於て同慶に憐えないものであります。

最初の集り

早急に諸方から集められた館府、殆んど知友はありませんでした。先づ三十六の各メスホールに貼紙を以て文藝同好者を勸誘し、第四十六部落のホールに會合を開いたのが、忘れもせぬ千九百四十二年九月二十日でありました。丁度手許に記録を所持して居りませんが、多分二十名足らずであつたと思ひます。

翌年二月發行の本誌創刊號の寄書の署名者は左の通りになつて居ります。

和歌に、

永瀬勇、阿部秋野、石川庄三、内堀三太郎、林元幸盛、児玉なを、松原信雄、安高きち、谷津いはほ、貴家しま子、岩永千代、赤星さと、土田親良、宮村一雄、安本時子、柳本錦子、森すみ子豊留たか、久留島扶紗子　北村利惠、柴田よし、矢形溪山、此の外に外川明、野田夏泉、大池智惠子の諸氏は初回から出席して下さいました。

川柳の方には、

鈴木胡仙、久野一路、山田如骨、山西里江、島原潮風、中山呑風、石川凡才、稲垣牧東、稲垣秋月、富田虎山、管野大海、津村汀村、竹下ゆづる、佐野不忘、野村白峯、土屋栗川、河島次彦、吉里竜耳、水畑素人、駒塚陽子、矢形溪山、片山幽香、

かうした陣容の下に短歌會は毎月一

田集會を催し、安高きち、永瀬勇両氏の擔當により、安高氏出所後は永瀬氏の熱心なる指導と児玉なを女史の援助により、数多の出所者あるに抱はらず依然として本誌中の異彩を放ってをります。

川柳は互週句會を開き、石川凡才君と未熟な私が整理の任に當り、幸に誌友の熱心な研究によりて、柳人一人もなかつたポストンから、各地川柳句箋に多くの柳人の名が連ねられる今日を思ふて快感を禁じ得ないものがあります。今後島原潮風氏の擔當により、更に瞩目すべき前途ある事を信じて居ります。

困難の回顧

館府の室々にはクーラーの設備があり、周圍は青々として清涼の影を宿して居る今、氷さへ得難かりし當時、汗の努力を續けて歌會に、句會に集まつた誌友の熱心さを顧る時ほんとに一つの感激であります。

千九百四十二年創刊號を發行しましたが、當時は相當な經濟的困難にも陷り、十六枚の賊布から無理な工面をした事も一再ではありませんでした。鉄筆擔當の富田虎山君にも只働きをさせました。

それと同時に印刷機を求めるまでは佛教會のお世話になって、石原、曽我部、倉橋の各師から受けた厚意は、文藝協會員等しく記憶せねばならぬ一事であります。

石川凡才、富田虎山両君が一時にポストンから去つて、私も編輯、印刷、

句會等一切の事務等を一身に受けて多忙を極めましたが、幸に佐川文子夫人の援助を得、島原、外川、野田、久留島、進藤、貴家諸士の好意的援助と寄書家の後援を得て、大過なく本誌の生命を繋ぐ事を得た事は永久に私の腦裏から離れない感謝であります。

この期間に最も苦しんだ事は文藝人の集る場所の一定しなかった事で、りクリエーションホールは學校となったため既得權を失ひ、其後各方面に手を盡しても効を奏せず、遂に短歌はせ七部落に、川柳は火曜會と合体してブラツク十九に落ちつきました。本協會の事務所も同様な意味で困りぬいて、遂に私の出所まで一室しかない私の宅を事務所にあてました。

今顧ると、其當時はまだ道路も修理されず、埃の深い中を長靴を穿いて歩むのは相當の苦痛でありましたが、句會を始めて以来趣味の友を勸誘する意味で、一日を汗にぬれて第一キャンプ全部のメスホールに詠草と句箋を貼って凡才君と廻りました。此の毎週の努力もある所ではブラックマネジャーやら了解のない人々から邪魔されて、直ちに剝ぎ取られる日も相當に續きました。今日ではこんな事はあり得べきではありません。それ丈け全部の人々に文藝の了解が進んだ事と思へば、又苦しみも嬉しさに変る事であります。

さて本會の創立以来時の移るにつれて會員中にも動搖が多くありました中に、俳壇の編輯を擔當された和氣湖月氏と、川柳の土屋栗川氏が他界された事は惜しみても尚限りのない事であり

ます。

本年に入りて轉住地閉鎖問題をめぐつて騒がしい中に泰然として、松原、有田の両氏が、本誌のために努力を續けてゐてくれます。

茲に両氏の健康を祈り一貫せる既往、現在の本協會の受けたる恩顧を感謝するものであります。尚餘白をかりて創刊以来の詞友諸君に深く敬意を表し、その發展を希望する次第であります。

本稿を認むるに當り多忙を極め文体をなさず、尚私の携つた関係上自己の記事に及んだ事の多きは私の不本意とする所であります。御諒解を乞ふ。

一九四五、六、一〇、

ポ文創刊時代の思ひ出

石川凡才

ポストン文藝第五號の編輯部屋欄に

「人間只一人を救ふ力、慰める力、それは實に偉大なる力なのだ。張合のない惱み多い境遇にゐる私達、その中の一人でもいゝ、本誌によつて慰め得らるゝならば編輯部念願の大半が達せらるゝわけ。」と、

この氣持を以て生れ出たのがポストン文藝誌であつた。

幸にも同好者の後押し、多數有志の方々の御同情により、危ながられた月刊誌の今日あるを喜ぶも

のである。

されど創刊時代を思へば冷汗が流れ、アリゾナの汗が身に泌む思ひがする。お先真つ暗の立退、處は炎熱地獄てふアリゾナの一隅、我等を待つものは生か、死か、その悲壯な覺悟を以て子を案じ老親を案じつゝポストン入をした私は、川柳人として只一人入所の寂しさに居つた時、數日後ボイル・ハイトの殿組として句友矢形溪山氏の入所するあり、その時私の喜は實に百萬の味方を得た氣持そのものであつた。その時の握手が既に文協を生み出す握手であつたやうに、今痛感してゐる。

二人寄れば話題は直に川柳となる我々であるが、さてこの炎熱を如何しようと思案の折、サンタアニタより句友國次史朗兄の便りに、是非ポストン入りをしたいから君等に手續を頼むとあつた。溪山兄と相談の結果史朗君を呼ぶには川柳の講師としてより道なしと決り、時のCA部長ポーエル氏に會談その事情を話せば、氏曰く然らば文藝協會を創立して後、講師として呼寄せ手續をしては如何と、恰もよし、追風に帆を擧げた心地にて直に文協創立の許可を得たのであつた。以上の如くにして他の文藝人を差置いて手を出したのでなく右の様な機會が、川柳道の繋りがポストン文協を生んだ道筋である。

さるにても入所當時印刷物の配布が禁ぜらるゝ儘に、數ヶ月の句箋歌稿は拙いペンを走らせて聽面もなくポストン三十六個のメス入口に、毎週一回或は二回貼付けて歩いたのであるが、足の重い羅府人溪山君と休み〳〵二日がゝりでテクッタのは一生の想ひ出となりさうだ。その貼出した句、歌稿に幾人かゞ足を留め批評してゐる樣を眺め、ほゝ笑んだ事あり、我等の努力が報いらるゝ事を喜び合つた事もある。それからセンター生活にも慣れ、事情が判然として手を出したのが月刊文藝誌の發刊であり、二人共素人、不安もあつたが、盲蛇に怖ぢずの譬の如く始めたのがあの創刊號であります。

一、二號はポストン佛教會の印刷機のお世話になり、印刷用紙を一枚々々添へては輪轉機を廻す有樣にて、今から思へばモデルT時代と云ふ感がするのであります。それにしても當時の各開教師並に幹事の方が我々の仕事を理解し勵まし下さつて、御教導下さつた事は忘れ得ぬ事であり、その時富田虎山氏が加はり、汗の中に原紙を切つて下さつた熱意と協力が礎をなして今日に及んでゐると信じます。

創立當時の記録がない爲記憶をたどり乍ら拙い事を書きました。

終りにポストン轉住所のある間文藝誌も共にある事を切望致します。

僕の雜記帖（2）

松原信雄

最近の感想

社會成員の自由競爭を原則とする近代資本主義社會は、優勝劣敗、適者生存の個人主義社會であるから、各個人は優勝者の榮冠を頂き、適者として生存せんがため、「立身出世」を目指し、「成功者」とならうとして、日夜奮闘努力を續けるのである。國家も亦世界の「最大強國」たらんとして、政治・外交・經濟戰に總力を傾倒して敢闘する。

我々日本人は個人としては生存競爭の優勝者、國民としては國家發展のためにと、海外雄飛の大望心を興し、資本主義華やかなりし米國に渡つて言語、風俗・習慣の相違といふ大きなハンデキャップや、人種的差別待遇といふ嵐に抗して、悪戰苦闘を續けて來たのである。

裸一貫で故國を飛び出して來た一世は、その勤勉忠實と撓まざる努力を以て他の民族を凌駕し、僅か半世紀足らずの中に、相當な經濟的地盤を築き上げたのであつた。

併し戰爭といふ慘酷なる現實は、我我個々の貧富や、市民・非市民の別を抹殺して、「ヂャップ」といふ單一稱呼の下に、「轉住所」入りを余儀なくさせたのであつた。

何れの轉住所も草一本生へてゐない原始以來の沙漠であつた。この沙漠に新生の第一歩を踏み出した我々は、幸

不幸を相共にする協同生活をはじめて経驗した。此處では経済上の競爭、相反した利害関係はなく、個人本位生活原則の代りに、集團のための協力が各自の生活原則である。

個人中心の社會から集團本位の社會へ、突如として移動された我々には、多少の紆餘曲折はあったにせよ、兎も角今日まで三ヶ年有余、自らを訓練して協同生活を完うしてきた。

外部に於ては、我々はひたすら各自の「成功」―蓄財―に全精力を傾けて来たのであるが、戰爭に依って初めて我我は、個人の無力と集團―國家・國民―の強力なる事實を認識させられ、國家觀念と民族意識―我々は單なる個人ではなく國家の一員であるといふ意識を換起させられたのであった。人々は個人の利害を考へる前に、國家と國家の運命に就いて沈思させられ、國民の一員として行動することを教へられた。かういふ点に於て、戰爭と轉住所とは人々に誠に尊い生活を経驗させてくれたのである。

「アイ アム スクール カンストラクション フォースト バランティア、假令戰時中であっても子弟の教育は等閑に附せらるべきではない。僕には子供はないけれど我々の二世や三世の教育のためと思って、僕はボストンへ着いたその翌日から、學校建築のために、百廿度、百世度といふあの炎天下で土を練ったものだ。その當時、誰一人として報酬のことなど考へてはゐなかった。漸くかうして立派な學校が出來上ったが、もう閉鎖されてしまった。そして我々は亦

此處を捨てゝ何處かへ去らねばならないのだらうか？」と、名物男王岡貫一氏（ドミニー・アインシュタイン）が述懷されたが、汗と埃にまみれて學校建築にヴァランティアされた同胞の奉仕的精神は誠に涙ぐましいものがあつた。

今年に入つて加州が開放されたので、この轉住所を捨てゝ加州へ歸還する人の數が次第に增えてきた。再び個人本位の生活へ還るのである。

私は同胞諸氏にお願ひしたい。假令何處へ行かう共、轉住所生活の尊い体驗を忘れないで、利己本意に走ることなく、同胞相依り相扶け合つて頂きたい。斯くすることが我々の義務であり、斯くしてのみ我々の發展が可能である。少數民族（マイノリティー・グループ）である我々は相互扶助と共存共榮の他に發展の道はない、と私は思惟するものである。

本誌に就いて

私達が「ポストン文藝」を引受けてから滿一ケ年を經過し、之が第二回目の七月號である。僅か百頁内外の小冊子であるが、それでも毎月出すとなると原稿、表紙繪の依頼、編輯、校正、印刷、製本、配本等相當人の知らない苦勞があるものだ。今日迄大過なくこの仕事を遂行することが出來たのは、實に後援者諸氏の御理解と撓まざる御支援に依るのである。茲に深甚なる謝意を表すると同時に、本誌が續く限り一層の御支援と御鞭撻を御願ひ申します。

終に本誌が凡て所謂バランティアの仕事で出來上つてゐる事を特記して、我我同胞の美しい協同心と協力の偉大さを讃へたい。

Shop at

SEARS

and Save

お入物は
シーアスで

メールの御注文
迅速に取扱ひ升

シーヤス
ローバック商會

SEARS ROEBUCK and CO.

LOS ANGELES, CAL.

詩 外川明
短歌 永瀬勇
川柳 島原潮風
俳句 外川明

希ひ

牧さゆり

ひたゝと波のよせるやうな
ノスタルヂヤの淡い想ひに
歸りたい――飛んで歸りたい
待ちこがれてゐる人達の膝に

雨の降りしきつた後の空に――
ホツカリと浮いてゐるよ！
白い雲が！
春の雲よ！

鷗が遊んでゐる
芽ばえかけた砂漠の草に……
フックラとした胸毛に口ばしを入れて――
父さんも母さんも一緒にゐるよ
アゝ……でもひとりぽっちの鷗もゐるよ。

遠くの方に　山が連らなる
山の向ふは――
バラ色にうづく様な匂ひがするよ
行きたい――飛んで行きたい。

私の祈りのかなふところに。

二十・五・二十三

霧深き夕……
乳色に濁つた感傷を抱いて
窓邊に寄る。

そつと押しあてた額に
快く冷たい硝子戸
私はぢつと滑り落ちてゆく
つぶらな雫をみつめる、
私の心にひかれた一筋の感情。

〃霧〃

芥川滋男

涙でみはつた瞳に
隣室の灯が
泌みる。
そこにも淋しい人生が……
蝕まれて魂の缺片(かけら)が……。

『貴男が幸福になつたら
私は何處かへそつと隱れるの……』と
云つたあの霧の中の女、
私はとめどなく
思出を追つてゐる。

一九四五―五―十二

生活断章

一陣二陣の
風にちるやまざくら。

×

鳴くかもめよ・かもめ
むこふの屋根にも半旗。

×

うらからノックする、
もも　さくらのはなざかり。

×

あとのだも
かいでゆく草の　觸覺。

×

おほきな雲影動かず、
雪の　やまひだまで
ようやく青みゆく、
五月を　ワサツチ連山

×

紫のかきつ　なよ〳〵
雨後の緑蔭。

鳩が巣につく聲の
みゆるかぎりの
若草の風光。

×

はなふぶき、
誰もゐない公園の露臺。

×

めにうつる新緑、
よくねてたべて働く。

×

かへでの
エルムのゆるる花の。
ネオンは
かはる〳〵色彩。

×

などて生死をよそに
またひとりゆく道の
ごごちない事ばかり。

『皐月　二十二、宵』

片井溪巖子

甦生

マツイ・シユウスイ

聖誕前夜
信子が生れた。

何となき尊さ
我らの父――神の贈物か。

この日から
自分の存在と大宇宙の表象に
俺は偉大なる眞理を發見した。

今まで無神論を主張した俺は
死と永生への懷疑を遂に確めた
そして常に叫ぶ　神さまよ……と

絶望の時――願ひの時
祈りの時――臨終の絶叫の時までも。

物質世界への文明
新發明への驚異
新生への凡ゆる智識を求めて
あゝ　長い三十年の無駄骨は
悶死に歸着する唯一の空論であつた。

もの言へぬ　わが兒の
形なきいみじき言葉
父の膝の上に　母の膝の上に
跳ね躍る素足の限りなき生きる力
俺の魂と細胞の連なり……

あゝ俺は理窟を言ふことを止めやう
キリストの再臨が目前に見える。

月光へ祈る

木内春波

さんさんと降る月光！
四邊に雑音もなし……
黒く、たゞ黒く平行する家々の
窓、窓の光りを見れば
同胞は、いまだ眠らぬ如し。

涼しき月光に誘はれて
逍遥ひ出で来し堀割傳ひ
吟じつゝ歩めば……
湧き来る淡き郷愁――

名も知らぬ蟲の聲踏別けて
唯一人月光を浴びて佇てば
夜の静寂に消えゆく諸々の雑念

ひたぶるに祈る心胸より湧きて
黙禱す――老ひ果てし父母！
富士の裾野の吾が家……
空に荒れ狂ふ敵機の襲撃に
災害を被りしてふニュースを聽き
ふるさとよ！戰時なれば文も通はず
四年の安否知るよしもなし
父母よ！すこやかに在せ
平和の日来らば、必ずや會ふべし。

祈れば熱き泪湧き出で
ひえびえと両頰を濡して
とめどなく流れ……流れて祈る。

夢の園

北見きよし

(一)

夢のブランコに、近寄って来るは、公孫樹の木の幹に深く刻まれたいくつかのナイフの傷跡がついた遠い昔の故郷の夢の庭。――――庭木も相當植えてはゐたが、母の腕に抱かれて子守唄を聽きながらよく眠った、公孫樹の木の下より外は、何處へも行かなかった私。ときく、思ひ立つと土遊びもしたし、叔父が飼ってゐる鯉の池に釣をはめては、その揚句、石を投げたり、棒切れを突っ込んだり、また、お山の大將になって隱れん坊には、不自由もしなかった遠い昔の夢の庭。――――もういゝかい？　もういゝよ！――――　綠葉の、大きな公孫樹の木の向ふ側の石垣づたひに、そんな聲の餅が、だんく小さく遠く消えてゆくやう、みんなの聲が耳の底にひそんでゐる庭。

(二)

一年中、何んとも言へない薫(かをり)を放って、綺麗な花が咲いてゐた庭。その庭に向った、南向きの窓邊に机を並べ、いづこからともなくひそかに訪づれくる季

節の聲に耳を傾けては、胸をときめかして羞んだあの頃。――机の上には、紅白の薔薇の花の二輪が、小さな花瓶に生けられ、その傍に、西條先生の抒情詩集がひらかれたまゝま、手に觸れられやうともせず靜かに羽ばたゝいてゐた。――あの頃のあんな夢のやうな思ひを、誰が知つてゐるだらう。おそらく、私と紅白の薔薇の花の二輪の外は。――私は當時、こんな事を夢にも思はなかつた。けれど、それがまた、私を現在の様に自然を愛するものにしてしまつたのかも知れない。

(三)

時は刻んでゆく。いつも同じ速さで、同じやうに、――けれど、絶えず新しく刻まれてゐる。そのやうに、私は夢みながら、いつとはなしに叔母の便りのことを想ひ直してゐる。――祖國は、いま新体制によつて空地を利用し少しでも多く農産物を作らう、としてゐる。私達も、あの公孫樹の木を切り臥せて、トマトやポテトや野菜類を作つて、家計の食卓にそなへてゐる。――あの昔の幼な頃の古い庭。もうないその庭を、私は、もう一度造り上げてみたい。が、もう到底出來ないその庭。――今時分は、芝生も青々として濃くなり、それからコスモスの花が咲いて、やがて紋白蝶の飛んで来る頃なのだ。――明かに眼の底にありながら、夢のブランコは、私を、掴みきれない幻想へと運んでゆく。

新俳壇

山が陽をのむと子供達散ってゆく

思ふことつきない別れの日が近づいた

丸い月に風がでて電線が鳴ってゐる

池に藤の花が垂れてる散りもする

眞上の太陽が池に浮いてメスの鐘

話せばわかることも秘めて別れてしまつた

ポプラ折れたところから今年の芽が出た

てふてふひらひらもつれてゐる青葉

一羽で来てゐる雀が時々首かたむける

さくらまんかいの夢見たこともふるさと

佐藤知星

自由律俳句

月光と涼風

大空と月と・そして私が立つてゐる

仙人掌の花あか〳〵蒼空に聲もなし

蛙鳴きしきる朧夜の土手の影と影

涼風蚊やりに乘つてくる隣家の軍艦マーチ

涼み臺寢そべつてこほろぎ聽いてゐる

下駄で入浴の氣樂さも忘れがてなるに

鉄柵とられても行き處ない私で青葉

路上松葉杖の傷兵を見る・はらからなりし

夕涼轉住を議してる岩山へ浮び出た月

吟ずればあわい鄉愁のありて青葉の月夜

木内春波

ポピイの會

五月句抄

十二日夜於餘子丈居

○

戰時下の女は馬も馭します荒ひ聲で。　萩尾芊作

おっととは別な考で初着縫ふてゐる。

○　森本彌山

獨りで歩るくどこにか囀ってゐる。

追はれて砂漠兎は命を走しる。

○　廣瀬米草

老母ひとりごちして糊こわい洗濯物入れてゐる。

返した土の匂ふポプラ大樹の空ひろく澄んでゐる。

○　米倉久枝

曇る半蕉の竿にとまるでもなく啼き去る鳥。

ひっそり日向は芽吹くもの芽ぶき囀やんだ。

○　米倉林泉

日に肥とり日に可愛ゆく夕暮は低氣壓。

硯石なでてみつさすりつ硯石。

○

兵隊さん痩せて寫って笑ってゐる。　中村夕佳里

人の死を聞くなと我が軒の晝の灯。　高木好文

○

白いアンビュランスから降りて高い煙突と初夏の雲。　府川眞砂夫

青葉となってまた日傘が通る遠山の雪。

○

東部へ再轉住を男きもぶとく話す。　片井溪嵜子

今日も炎天朝から金魚ぢっと口を動かし。

○

雜然と草もゆる裏町のすまゐ。　塩澤徹四郎

馬耕いそぐ夕べをつつみ焼くけむり。

○

今宵越す山が陽を入れてゐる。　林百尺樹

着いて我が家のステップをふむだ。

○

メドラーク朝晴れの朝を高音に。　松野寶樹

荒野から移し植ゑたサボテンの花です。

○

柳の芽がぬれてゐる朝のあいさつ。

雨靜なるミシン踏む音のおとなり。

○　細梅小夜女

種子蒔く片側に残る雪ありて。

手作りの酒飲んでWRAを罵倒してゐなさる。

○　田原紅人

婚禮の夜の人のにほいがいっぱい。

いくさして来た兵隊で淋しい顔してゐる。

○　津村木洋

渺々砂漠の花暮る〜密蜂なほも働く。

青芝たっぷり水やり夏月へまかしてある。

○　大山白鳥

何の怨ぞくさむらの中の蛇のまなこの光る。

親を馬鹿と言ひ得る十八の若者。

○　武井古流星

ドレッヂャー土あげて春の陽にふりむく。

白ら雲疊々と湧く心情けてばかり。

○　森田餘子丈

春の鳴かない鳥が木のないキャンプの屋根。

加州は山の向うかしようべんして砂漠。

皐月歌會詠草集

（順序不同）

リバサイド　廣戸靜香

日米の友誼に植ゑし櫻は咲けど其の國今は相撃ち戰ふ。
由々しかる時節にも愛し日本櫻異國の春に咲きしづもれる。
地は裂け火の降る祖國に春やある櫻めでつつ思ほゆるかも。
まざまざと目に浮び見ゆ笑ひつつ暇をつげし君が面輪の。（西本タムさんの戰死を悼みて）

清時文子

師の君の送りたびにし歌書讀めば情に觸れて涙湧き来も。
うみの歌讀めば吾が身につたはりて浪音ひゞく思ひするかも。

見玉なを

展覽會所見

おのもおのも究めし人々の出品物見れば三年のたづきむなしくはあらず。
倒れ木の常蔭の隈うちしめり緑さやかに苔むせりけり。
夕まけて庭べの花にこひ寄るは蜂雀らしかそけき羽音。
はしきよしいたく相似し双生児のころいづれを姉妹と見分け難かり。

シカゴ市　大空魁

さらさらと小波寄する水際まで今日は降りゆきて湖を見ぬ。
うすら日に水は明るく光りにつつ廣き湖面は蒼く澄みたり。
水鳥は波に下らずさはさはと湖の上飛びぬ霧雨寒き朝。
波の間に漂ふ鷗の一と群は霧雨の中に啼くこともなし。

シカゴ市　矢形溪山

うつし忘に集ひうつれる友見つつ吾れは偲びをりひとりびとりを。
低氣壓は湖の彼方に迫り来て軌道をきしる貨車の音高し。
かくれ沼は汽車の窓よりほの見えて水の面飛べるは鷺の鳥かも。
入沼は丘の新緑を濃く映しそよげる風に影ゆらめけり。

木下落葉

四月下旬入院腹部の切開手術を受く。

食を断ち身體清めてつつましく腹切開時刻の来るを待ち居り。
おごそかに眼光れる覆面の醫師等寄り来手術臺のわれに。
手術受けてみじろぎならずあなあはれ寄り来る蠅を持て餘しをり。
父の恙癒やし給へと枕邊に祈禱娘の聲は肝にひびきつ。

貴家未ま子

なだれ来て崩るる如く次々に消え去りゆくか持てる望みは。

欲せざる朝餉にはあれ食ふ事もつとめと強いて食堂にゆく。
石あたりて馬逃げたつに男の子らは面白がりて又投げむとす。

デンバー市　安井静女

母の日に染み染み思ふ古里に老います母や如何におはさむ。
吾が子等にかしづかれつゝ母の日を樂しく過しぬ旅の身忘れて。
人の家の野菜畑を見て思ふ我もよき菜をかつて作りし。
雪消えしばかりと思ふに今日の暑さ眞夏の如く戸毎に水撒く。

永瀬正臣

戰ひてあまた死ねるは夢かあらずわれ等やすけく生けりうつつに。
先長き戰爭と思へば勝つといへど負くるといへど心揺がず。
生れしが女兒なればよろこびのいろ張れり妻のおもわに。

轉住問題に就き兵なる弟より心配して文よこしたれば、

うらやすくあれよ弟よ生命あらば何邊ゆくとも我等生くるべし。

大園晴子

生れしより素直に伸びし吾れにかも僻み心の萠すはさびし。
はゞからず人中に出して乙女子のはなやかなりし頃を戀ほしむ。
戀の歌見れば哀しもまて乙女の頃は身をやく戀も吾がせし。
戰乱の時代の激しさをよそにして生花畫、刺繍と習ふ吾れはも。

あるじ無くも朝顔は咲きぬみまかりし人のみ靈を慰(なぐさ)むるがに。

赤松傳代

クーラーより絶えず落ちつぐ水音に吾れは故郷の樹雨偲びをり。

兵營に子は行きて未だ日浅きに別れてすでに久しき心地す。

北林静江

小さき紙の鯉のぼり今日かざりけり遠くし征ける吾子思ひつつ。

日毎来て敵機飛ぶとふ空の下にわが老い父母はいかにいまさむ。(故國爆撃ひんぴん)

泣きぬれて別(か)れがたくをるは姉妹かも我れも見てゐて涙わき来ぬ。

云ひたきを云ひ残したる心地して見送り見送るのびあがりつつ。

鈴木緑松

門毎(かどごと)に鯉の幟のたてられて児等に賑ふ二千六區は。

溝に居てよりくる蚊蚊(あぶか)捕らへ食ふ蝦蟇の素早き舌先きを見ぬ。

出所せし友が記念(かたみ)に呉れし椅子釘ゆるみゐて腰かけがたし。

春野来てこころ楽しも緑なす樹々に長閑けく鳥も囀れり。

高橋東民

轉住所感

病む身にも時の動きは迫り来ぬ心構へて堪へゆかむとす。

空しくも寂しき思念(おもひ)のみぞ湧くけふこの頃の世相視つめて。

部屋に射す朝の日光に一と線の煙草のけむりうすくたゞよふ。（病室）

沙原の岩山さみし初夏来れど若葉青葉の粧ひもなく。

クリスタル市　川原八重子

南の涯の州なるテキサスは國原廣く山一つなし。

ゆくりなくもこのテキサスに移されてあやに美しき星を見るかな。

見のかぎり山一つなき國原や望の夜を昇る月の大きさ。

思ひきやこのテキサスに移されて加州にまさる櫻桃食すとは。

川口靜洋

ユマ嵐心して吹け春や今沙漠に咲く花な痛めそ。

子なき身は何を残さむ一すじに吾が代を修め悔なきを期す。

訪づるゝ人も稀なる岩山に鉄木花の紫咲きみだれあり。

鉄木てふ名にも似つかずやさしくも咲ける紫の花のよろしさ。

永瀬　勇

淺學を愧ず（二首）

大いなる間違ひあるを吾れに見て今日は飯さへ喉越さずをり。

識らざるがしりをるふりにもの言ひて大き間違ひをせりけり吾れは。

久しくも訪はざりければ病む歌友のほとほと吾れを見忘れなむとす。（高橋東氏氏を訪ふ）

國思ふ心はよけれかたよれる見解に他をあやまるべからず。

後記

鶴湖に在る　矢張り同じ道に趣味を持つ一先輩からの近信によると　あちらでは　五月の半ばごろから　既に十日あまりも殆んど毎日の様に　雨か　霰か　ある時は牡丹雪　と云ふ風につゞいてゐる由で　又時に夜半から晴れ上つた朝などは　結氷もしたりするとか　全くポストンに居る吾々には想像もつかぬことであり　眞に不順な天候がつゞいてゐるとのことである。其う言はれると　此處ポストンでも五月初旬にあつた暑さに比べて中旬以後昨今は却つて凌ぎ易いやうな氣がする。殊に朝夕の涼しさは一寸日中が暑いだけに又格別のよろしさがあるやうに思はれる。今日なども クーラーを要しない位であつた。其の午后吾々は例の如く月次歌會を催ふした。集る者十二名　三、四欠席された方もあつたが　轉出の爲め歌友の激減を嘆つた吾々歌會としては　十二名の出席は先づ滿足と見なければなるまい。少數ではあるが皆熱心に勉強をつゞけられるのを見て　自づから頭が下がる思ひであり　又つまらない愚生を何時までも支援して下さる諸兄姉の御協力には深く感謝してゐる者である。前記の如く今年は暑さが来るのがおそいのかも知れないが　いづれは其の反動が来るに違ひないから　諸君にはよろしく御自愛あつて　今の健康を保ちつゞけられむことを祈念しつゝこのペンを擱く。

（五・二六　記ス）

伊藤左千夫の歌　數首

今の我れに偽ることを許さずば我が靈の緒は直(すぐ)にも絶ゆべし。

生きてあらむ命の道に迷ひつつ偽るすらも人は許さず。

まずしきに堪へつつ生くるなど思ひ春寒き朝を小庭掃くなり。

海山の鳥けものすら子を生みて皆生きの世をたのしむものを。

漬物に汁に事足るあさがれひ不味(まづ)しともせぬ児等がかなしも。

いとけなき児等の睦びやしが父の貪しきも知らず聲たのしかり。

おり立ちて今朝の寒さを驚きぬ露しとしとと柿の落葉深く。

今朝の朝の露ひやびやと秋草やすべて幽(かそ)けき寂滅(ほろび)の光。

選後隨録

みどり子をかい抱きつつ臥しゐます面わにあふる聲なき聲は。

右の歌何う云ふ場合に成つた作か其れさへも充分に解らぬものであり全体が抽象的表出で具象化に欠けてると思ふ。殊に四、五句作の重心とも成るべき處が斯様に意味曖昧な言ひ方では物足らないと言はざるを得まい。單純に　卒直に　そして具象的表現と云ふ事に心掛けられ度いものである。

手術受けし傷口痛む小夜更けや十字架の上のイエス偲ばゆ。

言はれてる事の意味は解ると思ふが　感じとしてしつくりと沁み透るものが無い様に思ふ。四、五句などの形容法は特に作意が目立つて却つて作を失敗に導いた感であらう。其れから此れは穿ち過ぎた物言ひになるかも知れないが　上二句は「手術後の切口痛む」と様にあるべきではなからうか。同じ事を云ふにも吟味に吟味を加へて一番適切だと思ふ語句を使用せねばなるまい。其れを成す處に苦心もあり樂しみもあると思ふ。語句の選擇と云ふ事に就いて　今此處に最も良い參考になるものがあるから其れを諸君に示して此の選後隨録を閉じる事にしやう。北原白秋氏の作歌の實例と題する歌文集の中から拔萃させて頂きます。「深山路は驚きやすし家鳥の白き鶏(かけろ)に我が遇ひにけり。」紀行文中略。さてこの白鶏の歌だけは「日光」の

「碓氷の春」一聯に出てゐない。題材は掴めたが完成までには爾後三、四年はかかった様に思ふ。ノートには「思はぬを鶏に遇ひぬ」「思はぬを鶏とし見つ」等の句から次の様に移ってゐる。「○○○○○○の人の氣もなき山岨に我おどろきぬ鶏とし見つ。」「春たけて(日の照りて)いよよさびしき高岨に我おどろきぬ庭つ鳥見つ。」「春ながら山の氣ふかき高岨を白き鶏の歩みゐにけり。」ここで一旦匙を投げたものと見えてまた第二第三の景情へ觸手は動いて行った。「蓬伸び鶏群れたり墜道の断れ目の岨の光の崩れ。(日光)」「庭鳥の雲井がくりにつぎ啼くはさびしくしよしこの高山を。」(抹殺)「思はぬを鶏つどへる高岨に垂りつつ黄なる山吹の花」(抹殺)その後、前者に未練があってまた凝りはじめた。「雲かよふ山岸高く啼く鶏の、、、、、、家かあらしも。」「うすひねの山岸高く」「歩み来て驚きにけり、、、、、、白き鶏をる」「驚きぬ人の氣もなき高岨に、、、、、、白き鶏の遊べる見れば、、、、、、ひとりあさりをするが、、、、、」等々書き記せば限りない故　簡單にこれだけに留めるがやっとの末で「深山路は驚きやすし」の初二句が成ったところで　爾餘は從って自然に調べられて来た。

以上先生のお言葉其のまゝを寫して見たが　あの歌聖とも言はれる先生に尚ほ此の苦心があるのである。學ぶべし。

マンザナ吟杜句抄

安田北湖

立ち出づる塵のマンザナ木の芽時。
大セラも今は情あり雁名残。
木の芽吹くキャンプマンザナ去り難な。
懐に身元證明春の旅。

小坂静子

閉されし食堂の園あやめ咲く。
小川邊に謠ふ女や風薫る。
よちよちと歩む兒うれし日焼して。
尺八も琴も聞ゆる片陰に。

木村白嶺

水遊び餘念なき子や花菖蒲。
開け放つ裏戸々々や風薫る。
片陰やしばしの閑の料理人。
日焼人一つぱい乗せてバス發ちぬ。

山崎玻璃女

薫風や畠をぬけて句の會へ。

病む友に色濃かりけり花あやめ。
物思ふ日の續くなり花あやめ。
見なるれば日焼の顔のよかりけり。

望月寄風

鋏手に佇づむ人や花あやめ。
釣人の腰に辨當風薫る。

上村若舟

片陰にしばし出所の立話。
セージ野に戰ごっこや日焼の子。

出屋天眠

夕映ゆる池を廻りて花菖蒲。
片陰に人垣つづくメスの陣。

山田天民

日焼の子庭の眞中に泥いぢり。
ローカスの影に讀書や風薫る。

永井翠畝

さゝやかに母子住へり花あやめ。
薫風や女(オミナ)がたゝくメスの鐘。
頼もしく日焼けて兵の歸り来し。
出所バス送りて巡査片陰に。

俳句 春雜詠（ハートマンテン） 藤岡無隱

口大統領急逝

忽焉と天地に轟き春の雷。

獨逸無條件降伏

春愁や龍頭にして蛇尾の民。

ハート山裳裾彩り春深し。

夏近し落暉の歩み遲々として。

十字架を負ふもの出で上復活祭。

春天を高く指す女神像。

草餅や故里遠き移民鄉。

乙女子のバンダナ紅し若葉道。

夏隣ここ高原の三昧境。

野蒜の可憐の花や棘の陣。

泡の旦つ消え旦つ生る春の川。

ポピー咲く加州の春を忘れめや。

俳句 鉄木の花を訪ねて 吉里竜耳

うち仰ぐ鉄木萬朶花盛り。

巖頭に佇つて見下ろす花鉄木。

鉄木花觀んとをみなの三五人。

移り交る蜜蜂あまた花鉄木。

谷の隈まこと疎らに花鉄木。

鉄木花實らば藥になるとかや。

俳句 行春雜詠（トパス） 島本巽村

渡洋すと逢ひに来し子と春惜しむ。

暮れてなほまばゆき風や茜空。

貌赭き雉子が飛び翔つ野火明り。

雉子ならんセーヂ野づらを掠め消ゆ。

灯蛾飛ぶやアーク燈下の野外劇。

祝 全快

さつぱりと髪も洗ふて豫後らしく。

ポストン川柳

初歩 添削講座

島原潮風

課題「皺」△原句○添削句

鈴木緑松

△三年も配米食つて皺も増す。

毎度云ふ如く「増す」と終止段で切らない様にすべし。

○三年の館府生活皺も増し。

△初孫を皺目で覗く祖母の腰。

初孫と上五で言つて居るから(祖母)は贅字。然して皺目と腰とさう澤山に盛り込まんで、

○初孫を皺目で覗く母の顔。

で題は詠んであるから腰まで云はんでもよし。

△年の数隠し切れない顔の皺。

齢の数が皺では判らないから、

○寄る年を隠し切れない顔の皺。

△染髪で隠し切れない顔の皺。

之では云ひ足りないから、

○染髪をしても隠せぬ顔の皺。

△髪染めて義歯はめてさて顔の皺。

髪を染め義歯をはめたぶさて顔の皺が隠せない。折角だが齢は爭われない。この句でも解るが、

○髪染めて義歯さて困らする顔の皺。

竹本芳公

△四十年苦闘の跡を皺に見せ。

添削不要。

△めつきりと皺が殖えたと皺が言ひ。

皺が言ひ、と謎のやうに言はずに、

○めつきりと皺が殖えたと友が言ひ。

或は「妻が言ひ。」

△口程に若くはないらし皺の数。

皺の数は判らないから。

○口程に若く見えない顔の皺。

安井靜女

△出直しだしつかりやれよ皺も立つ。

○出直しだしつかりやれよ皺の君。

△つぶ揃ひ皺が育てた立派な子。

立派な子は不必要、つぶ揃ひで判るから贅字は省いて他の言葉を入れるやうすべし。

○つぶ揃ひ皺が育てた二世兵。

△さあやるぞやりましようやの皺の腰。

やりましよう〳〵、えから鬼の征伐に、と桃太郎でも唱いたくなる。

（皺の腰）腰に皺がよるのは判らないから、左記の様に、

○さあやると氣丈けは負けぬ皺の父。

又は「叔父」

谷本晩香

△能く見れば妻も小皺の齡になり。

添削不要。

△お隣の顔へも矢張り皺が出来。

お隣の顔では誰か判らん、ミセスとかミスターとするがよい。

△再婚へ少し氣に持ち顔の皺。

大分年増の再婚らしい。

○再婚へ少々氣になる顔の皺。

堀田飄池

△パロールで歸つた父の皺に泣き。

パロールで（歸る）は必要なし。皺に泣き、と去って終はんで、

○パロールの父の小皺に目がうるみ。

△久し振り歸り目につく娘の小皺。

添削不要。

△發刺と育つ背後に母の皺。

添削不要。此意氣〳〵。

関五松

△獨身だなと思はれるシャツの皺。

妻君があってもシャツに皺がある人も見受けるから、よく氣を付ける

事です。添削不要。

△言譯は只伸して居る膝の皺。

之だけでは云ひ足らん。

○云譯は膝の皺丈け鏝をあて。

△化粧では隠せぬ皺を撫でても見。

撫でゝも見、では未だ言ひ足らん。

然して之では余り幼稚だから左の

様に詠んだら可成の川柳になる。

○溜息は化粧で隠せぬ皺を撫で。

※　※　※

又今回も（皺）を投吟下さつた事

を深謝します。

鶴湖　竹原白雀

永住ときめて淋しい顔の皺。

此間の活動のお婆さんではないが

もう四十年若ければねー。

寫眞師は晴衣の皺に注意をし。

新調であるが安物皺が出來。

※　※　※

▲同　課題「影」　島原潮風

△原句○添削句

安井靜女

△遠方にいてもはなれぬ母のかげ。

之で大体纏つてゐるが、川柳味は

極く乏しい。

○遠方に居ても浮ぶは母の影。

と添削して見ても矢張り原句との

差はあまりない。

△母の影忘れん子等は日々眞面目。

成程眞面目な子等は母の影を忘れ

ぬでせう。然し之では文章ですか

ら少し川柳がかつた添削をすると、

○母影を忘れぬ眞面目褒めたふみ。

△母の影みちびいて行く登龍門。

之も文章です。左の様にしたら幾

分か川柳になる。

○導きの母影浮ぶ登龍門。

森岡春山

△金魚鉢影も動かぬ晝盛。

之は一寸面白い見付け處。添削不要。此の調子で進まれたい。

堀田瓢池

△訪へば先づ影膳に胸うたれ。

之も文章です。少し添削すると川柳になる。

○訪へば先づ影膳に胸を打ち。

△邪魔すまい人影二個へ路をかへ。

此の句で成程と意味は判るが、之を逆寫法を用ひて反對側から詠んでみる。

○人影の二人へ邪魔と路をかえ。

△影武者を死なし蟄龍再起待ち。

此の句は影武者廿人もあると云はれるスターリンを龍に譬へて再起を待ちつゝある事を詠んだのであらうが、斯る句は仲々詠み難いから、

○影武者を使つて再起待つ苦心(野心)と當らず障らずに詠む方よし。

竹本芳公

△キャスターの影はっきりと夏の午後。

之は俳句みたいであまりに其まゝでは川柳味はないから、

○キャスターの影へ二人は夏の午後。

とでもしたら幾分意味がありさうだ。

△紅の日傘の陰のいゝ女。

此句もいゝ女と見た丈けで意味はない。

○紅の日傘を陰に通るしゃん。

とでも詠んだら幾分か川柳味がある。

△いゝ女日傘の陰でよく見えず。

よく見えなければいゝ女かどうか判らないから、

○いゝ女らしいが日傘の陰になり。

谷本晩香

△成功の裏に優い母の影。

○成功の陰に優しい母があり。

△煙幕の影へ暫時の命請い。

○煙幕の陰へ暫時と走り込み。

関　五松

△瞑目をすればふうはり富士の影。

中五の「すれば」は贅字

○瞑目にふうはり神秘な富士の影。

△面影を抱いて一生鰥處に老へ。

どう云ふ面影を抱いてか判らん。

○淑しさの面影抱き鰥處に老い。

△あの頃の影をそっくり娘の靨。

此の句は少し無理の影だから、

○若かりし妻の面影娘の靨。

又は（あの頃の妻の面影娘の靨。）

「面影の変らで齡の積れかし」　小町の上の句で終る。

▲同　課題「指」　島原潮風

△原句　○　添削句　森山春山

△指ねぶり〳〵ねむたい乳母車。

余りに其まゝ過ぎる嫌いがあるから、左記の句と比較對照して見て下さい。

逆字法に反對から詠む。

○乳母車子は寢むたさう指を吸ひ。

堀田瓢池

△口紅をさした指切り征旗染め。

口紅をさした指切りは余り丁寧過るから、

○紅指を切りて撫子征旗染め。

△指切りて娘等は血染めし旗贈り。

よく指を切りますね！　之で判りますが、「切りては」贅字。どうも之では文章だから、

○指の血で染めた征旗を娘等贈り。

△李兵衛も三軍指揮の子をつくり。

三軍を指揮する優將の親は李兵衛さんである。一世諸君二世を斯く優將に育て上げることです。

○大軍を指揮する子持つ李兵衛さん。

とでも詠んで文章から逃れる。

谷本晩香

△指の血を鑑られた決死隊。

指の血で染めた旗を決死隊に贈けられたと云ふ意味ださうだが、之では其意味が通ぜん様である。だから左の様に詠んでみる。然し苦吟しても余り感心しないやうである。

○指の血の旗贈ける決死隊。

△タイプ打つ指も黙禱正す襟。

正す襟では黙禱にならんが粛然の意味にはなるから之を省いて左の様に詠む

○タイプ打つ指も一分黙禱し。

関　五松

△戦報にマツプを走る指の先。

指が走ると形容はよいが、マツプを走るとせずに、上を走ると詠んだ方がよい。

○戦法にマツプの上る走る指。

△歸還する其日へ母は指を折り。

之はまあ無難である。柳味は少ないが添削不要。

△白魚かちよいと挾んだ巻煙草。

白魚が巻煙草を挾む譯はない。白魚は指にたとへてあるのだから、

○白魚でちよいと挾んだ巻煙草。

竹本芳公

△アスパラのやうな指でタイプ打ち。

中七が一字足らんから左のやうに、

○タイピストアスパラ見たいな指で打ち。

△婚約の指輪をはめて嬉しさう。

下五の嬉しさうと云って終はないで、

○婚約の指輪をはめて微笑む娘。

△四十年苦闘の跡は指の節。

此の如く作句して欲しいのです。

然し難は跡と云はずに

○半生の苦闘を語る指の節。

四十年の、では一字多いから十年程多く言って五十年、即ち半生としたら、

（の）が這入る。

※　※

▲第六十五回句會

課題「早婚」　鶴湖　瀧川巴水選

前　拔（順序不同）

子供だと思ふ世間を二人仲。　竹原白雀
母の計に會つて早婚すゝめられ。　難波桂馬
小娘と思つて居たら母であり。　吉里竜耳
別々の恋秘めて嫁す二八の娘。　小町谷拳君
早婚が一億萬のメンパワーア。　星野光葉
恵まれた早婚今日の若隱居。　同
早婚の是非は互に神任せ。　同
恋知らぬ儘に嫁いで子澤山。　新屋軟葉
早婚を耳に入れない女大學。　同
早婚に共稼ぎする荷を纏め。　同
危んだ娘の早婚も今の幸。　吉村芳乃
早婚に破れ女の發明家。　同
早婚を悔いては居ない夫婦仲。　稲垣秋月
早婚をさせて母親いとしがり。　同
早婚を笑つた友はひとり老い。　北村子守
人が欲しい早婚すゝめられ。　早川美貴子
早婚の姉を笑つてオールミス。　同
早婚を名にことはつたいやな人。　山内狂月
未だ年が若いと仲人無駄の足。　同
三十路子と同年の孫の守。　同
還暦でもう曾孫に對面し。　松本敎子
ちと早いそしりをよそに兵の嫁。　同
早婚の苦痛に代る若隱居。　津村汀村
長男を嫁にして白を切り。　鈴木胡仙

十　客

仲人が最うつきまとう卒業日。　早川美貴子
早婚が生んだ悲劇も戰時色。　北村子守
友情を越えて十五の綿帽子。　竹原白雀
子供氣の抜けない儘に母となり。　吉村芳乃
早婚にすねて女の博士舞。　川島次彦
初恋が叶つたやうな若い妻。　稲垣秋月
國策に添ふ早婚の底力。　津村汀村
早婚の昔を偲ぶ寫眞帖。　同
三人の父で除隊の若い父。　稲垣秋月

五五の春四人の父と羨まれ。　鈴木胡仙

人位　竹下ゆづる

早婚のお嫁家事には遠く住み。

評　早婚の花嫁がまだ満足に御飯も炊けず刺身の造り方を愚妻に尋ねに来たことを知ってる選者に見逃難い句である。而も「遠く住み」と結んだ所非凡。時々まだ〳〵お母さんの乳を呑みに行く若い嫁さんが瞼に浮ぶ。

地位　竹原白雀

出つかぬ蕾へいそぐ内祝ひ。

評　上京勉學中の娘より出で悩まされて居る一信に、スワ一大事とばかり親が寄宿を尋ねた處、それがベッド出であった挿話も思出されて親々の心情から頷けるものがある。

天位　森岡春山

早婚も非常時局の波に乗り。

評　いろ〳〵の意味から早婚が實現されつゝある現代の姿を率直に詠んだ新らしい着想へ上五の「も」と座五が此句を強く生かして居る点を天位に頂く。

軸

まだ習いたい数々へ嫁の口。　巴水

▲次回課題　（締切）

句會「飲み仲間」塩出大洲選　七月十七日

「黙　禱」山内狂月選　七月十七日

互選「変る」三句　七月十日

「溜息」三句　七月十日

添削「家」　七月十五日

訂正　六月號27頁川柳清水迷舟氏選「意外」の人位竹原白雀氏の「インタニーの顔には過ぎた父の顔」の顔は「髭」であります。

○互選及其他本號記載洩れの分は、次號に掲載いたします。

おもかげ

木内春波

「小父さん、今日はどんな具合ですか、少しは氣分……いゝですか。」

輝吉は眼を開けた。惠美子である。いつも親切にやさしい看護婦助手で、年齢は二十歳かそれとも二つ位加へねばならないか、日本語も上手に話すし、親しみ深い二世の娘である。

突然喀血したので、驚いて入院した古木輝吉老人は、エキスレー診察の結果、胃癌であるといふことが判然りしたので、重態患者として獨り別室に入れられて、此の娘と黒人の看護婦との二人に看護を受けてゐたが、痛みのやはらいだ時なぞ、水を呑ませてくれたり枕の位置を變へてくれたり、心からの看護をしてくれる此の娘の、どこかに見覺えのあるのを感じた。昔何處かで逢つた事のあるやうな、併し此の娘はまだ若いし、どこで會つたとも、夢に見た誰かであつたかも明確でない。たゞあわい記憶のそれであつた。

「あゝ、お蔭で氣持はさっぱりしたが、やっぱり胸のところがね、どうも……。」

輝吉は顏をしかめて見せて、同時に右手を白布の中から出して、上腹部を自分

でちよつと撫ぜて見せる。

恵美子は、テーブルの上の汚れたタヲルやらちり紙の丸めたのやら、そこらを片付けて昨日自身で持つて来て老人のテーブルに活けてやつた、家の庭に咲いたと云ふ草花の水を換へて、しぼんだ花の二ツ三ツを摘み取つて捨てた。

一應部屋を片付けて、枕の位置を老人の好む方向へ変へてやつて、白布の裾の一方をパッパッと平手でたゝくやうにして延ばしてから、枕頭に立つて檢温器を老人にくはえさせると、腕時計をちよつと見て、ベッドからぶらさがつてゐる老人の細い手首を軽く取り上げて、脈搏をとる。

拾六弗の月給だけでは看護婦助手はやれない。獻身的に患者につかえる心、人間の持つてゐる慈愛を大きく活かしてこそ斯うした仕事もできるのだ。輝吉老人は檢温器をくはえながら、有難さうに恵美子の顔を眺める。

「小父さん大丈夫よ、毎日のやうに、小父さんの體は元氣付いて来るわ、これで胸の痛みさえ取れゝば達者になれてよ。もう少しの我慢だわ、小父さん……」

斯う言つて娘は微笑をうかべる。

「ありがとうよ。お蔭でね、わしもなんだか自分の娘にでも看護して貰つてゐるやうな氣がしてね……あんたが居らないと寂しゆうてな、それでも若いにあんたは感心な娘さんぢや。」

老人は斯う言つて恵美子の顔をしげじげとみつめる。

「情は人のためならずと言つてな、斯うして不自由な人々につくしてやれば、吃度あんたは立派に成功しますよ。いや俺ひとりの祈りだけでも神様が、あんたを見守つて下さる。たくさん看護婦さんも居られる、なあ……そのうちには通りいつぺんのお役目だけで看病する人もある。俺は決して文句をつける譯ぢやあないがのう……あんたのやうに心から身體を動かしてつくしてくれる人もある。せは様々ぢやよ。斯うして病んでゐると他人様の親切が、涙のこぼれる程身に滲んで有難い事で。」

老人は自身に言ひきかせるやうな、娘に話すやうな、力のない聲で心の底から言つて終ふと首だけ板壁の方へ向けた。胸が波のやうにゆれる。老人は泣いてゐるのだ聲も出さずに……。

「小父さんは、病氣だから氣が弱くなるんです。くよ〳〵するものではないわ、妾だつて、何も特別につくすと言ふ譯ぢやないんですよ。斯うして、こんな所へ入れられてゐれば皆、困つてゐるんです。誰の罪でもない戰爭の罪です。皆各自の國家のため、永遠の平和のために戰爭してゐるんです。戰爭中はこんな土地馴ない沙漠に收容されて、お互に不自由をしてゐるんです。困つて居る人や病氣の人を、見てあげるのが達者な人の義務ですわ。ねえ小父さん、オレンヂ　ジユースかジャローでも食べて見ませんか？。」

「あアー有難ふ、それぢやお手間ついでにジャローの冷いやつを少し貰ふか

ね、あんたが来ると俺も元氣が付いてなあ……。」と、老人は痩せた拳骨で、西眼を二三度こすり、ほんとうに元氣付いたやうに顔をこちらへ向け直して娘の顔を見上げた。

恵美子はドアーのかはりに置いてあるスクリーンを廻るやうにして出て行った。隣室で力の無い子供の泣聲が聞える。病院の午後は死んだやうに靜かで、クーラーの廻轉する音のみが生きたものゝやうで、外部の火焔のやうな暑さが板壁をつき通して来る。

恵美子は食堂から持って来た氷の破片のやうに冷たいジャローを輝吉老人の口へスプーンで流し込んでやる。老人がうまさうに食べた後を、丁寧に口を拭ってやって、グラスのピッチャーに新しい氷水を注ぎかへてから輝吉に顔で會釋して、隣室の方へ巡廻を果すべく出て行った。

老人はぢーっと見送って、取り残された孤獨感と、上腹部のチクリ〳〵と刺すやうな痛さを神經に感じて心細かった。昨日恵美子が持って来てくれたピンクのグラデオラと、赤白まだらのスイート　ウイリヤムの可憐な草花に眼を移して考へに沈んでゆく。肉眼で見てゐる草花は次第に消えて、心の眼に映って居るものは、何故か恵美子の面影だった。

丸顔の、鼻はちょっと低い方ではあるが、別に目立つほどでもなく、小さい口もとがその鼻にバランスして愛くるしい顔立に見せて、笑ふとき、右の頬に

かすかな靄が現れ、、、、、、、確にどこかで見た顔立だと老人は思つた。それが何處だつたかは、はつきりしない。十年前か、それとも十五年以前だつたか、それとも、どこかで寫真で見た顔か、、、、、老人はどうかして思ひ出さうと努力する。チクリ〳〵痛む胸の事も忘れて、だが思ひ出さないうちに老人は眠つて終つた。

病人は眠つてゐるあいだが極樂である。重患者は苦しみを忘れ、輕い患者は退屈を忘れる。輝吉老人が眼を覺した頃には、窓外の太陽はかげつて、四角に區切られた窓の青空だけはまだ明るく餘光を殘してゐた。

夕食の膳部が車に乘せられて運ばれた。老人は元氣で入院六日目の今宵、始めてベッドに坐つて、流動食物のあれこれを二品三品嚥を通した。

「小父さん、、、、今晩は馬鹿に元氣ね。」

看護婦の惠美子は笑つて見せた。

「今日、一眠りして起きると大変お腹が空いたよ、食ふものもうまいし、お蔭で此の分なら、たすかるかも知れないなあ、みんなあんたのおかげでねエ。」

老人は心からさう言つて、頭を下げた。

「そんなお禮には及びませんわ。小父さんこれから身體を拭つてあげるから、そしたら又眠つて起きなさいよ。ねー眠ると吃度神經がやすまるんですよ、ドクターがいま来てくれて、ゆつくりやすまるやうに注射をして下さいます。」

恵美子は丁寧に顔を拭ってやり、足の爪先まで、濡タヲルで拭って、そのあとをアルコホールを濕したガーゼで又ぬぐいとって、部屋のあれこれを片付けるのであった。其處へ聽診器を片手に女醫のバートレット女史が這入って来た。

一應診察してから、老人の左腕に一本注射をすると、恵美子に何か二三の事を注意してから、

「おやすみなさい。」

日本語でさう言って愛嬌笑をして出て行った。恵美子も、何かすることがあるらしく、女醫の背後について出て行って終った。

老人は又、ぐっすり眠って、眼覺めた時は電燈が弱光を部屋に投げて、廊下を人の足音が騷々しく往復した。面會時間で、見舞の人々の出入が激しかったが、身寄りの少い獨身の彼には見舞ってくれる一人の友もなかった。

老人の病態も余り変化もなく四五日、斯うした容態が續いた。恵美子が當番で宿直の夜が来た。彼女は他の患者の用務を濟ますと、其の夜は殆んど輝吉老人の部屋に来てゐた。まるで特別看護婦のやうに附添ってゐるのであった。老人も氣分がいゝのか、話相手があって嬉しいのか、色々と質問したり自分の身の上話を聽かせたりした。

夏の夜の病院は靜かに更けてゆく。時々廊下を軽い足音を立てゝ通るのは恵美子の同輩で、これも心根のやさしい君江と呼ぶ娘で、老人は好きであった。

輝吉老人と、惠美子の會話はぽつり〳〵と續く。惠美子は話を聞きながら、毛絲の編物をしてゐる。

「それで、何かねあんた達は桑港から来たのかね。俺もあちらには永く住んだこともあったよ。未だあんたの生れない頃たがね……古い話さ、あんたの苗字はなんと呼ぶのかね？　こんなに親切にして貰って、恰で吾が娘に看病して貰ってゐるやうな心地がして、姓名だけでも覺えて置かんと、若し死んでも、閻魔さまに斯う言ふ親切な娘が居りましたと報告も出来ないからなあアハハ……。」

「小父さん、ずいぶん元氣になったのねえ、笑へるやうになったもの……此の分なら、明日にでもドクター　バートレットから診察されて、ミスター古木もう部落へお歸りなさい。大丈夫になりましたって言はれますよホ……」

「いや、まださう元氣でもないがねエ。あんたと話してゐると、つい腹の痛いのも忘れてしまって、いま病院を追ひ出されても困るが……昨日あんたが休日と知らないで、夕方まで、もう来るかもう来るかと待ちこがれて、とう〳〵晩の宿直の娘さんに聞いたら、惠美子さんは休みです、と言はれてがっかりしたさ。急に腹がづき〳〵痛み出して、昨日終日と今日の夕方まで淋しくて、どうにも斯うにも……。」

「小父さんは仲々お世辞が上手ね。でもさうまで言はれると、妾だって嬉しい

わよ。妾……のラストネーム――石岡と言ふの。パパは桑港で切花屋でした、でもパパはもう死んで終つたし、妾、お母さんと兄さんと弟と四人で此處へ来るまで店はやつてゐたのですけれど、小父さんもあちらに居られたことがあるならきつと知つていらつしやるわ、古い花屋よ大勝堂と云つて、ゲリー街の坂を下りた所の……。」

瞬間、輝吉はグワンと、脳天を鉄棒で、どやしつけられたやうに感じた。

「あゝ、さうだつたか、知らなかつた。さうだつたのか！……道理で、よく似てゐる。思ひ出せなかつたがこの顔こそ彼女の顔だつたのだ……。」

老人は心の叫びを危く口に漏しさうだつたが、ぐつと我慢して表情をもとへ戻した。

「いま急に痛みがきてねエ、やれ〳〵もうなほつた。」

ホツとしたやうに言つて騒ぐ胸中を押静めて、娘に氣付かれぬやうに病氣にかこつけはしたが、瞬間眼の前が闇くなつて、火花がパチ〳〵音をさせて飛んだやうな氣もちがして、ほろ苦い感じが頭の中を往来する。娘にはさり氣なく、

「あゝ、あの花屋の娘さんかね。仕事に通ふ途中よくあの店の前を往復したものだつたが、ママさんは御丈夫かね、會つたことはないが……。」

「えゝ、ママは丈夫なんですが、パパはもう七年前、自動車のアクシデントで死んだの。妾等兄弟三人とママは、始めタンフォーランのセンターに收容され

てから、こちらにママの親族を頼つて第三館府へ来ましたの、ママも此處へ来てから氣候に合はないのか、元氣がなくてづつとぶら〳〵してゐます。兄さんは歐州の戰地に居るし、弟の良一は未だハイスクールで、来年六月でなければ卒業しませんの……。」

輝吉老人は、聞けば苦しいが聞かずには居られない衝動にかられて、黙したまゝ彼女の身の上話を聽いてゐる。

「ママは、戰爭が濟んだら日本へ歸り度いと言つてゐますの。ママも米國生れではありますが、小さい時から日本で養育されたので――それにお祖父さんやお祖母さんも未だ達者で廣島に居られるので、孫が見たからうとママは言ふの。でも妾達反對してゐるのよ、いつ止むか解らない戰爭を當にして計畫したつて始まらないわねえ、小父さん。」

老人は眼を閉ぢたまゝ返事をしなかつた。

娘は腕時計をちよつと見る……もう夜中で十二時をすぎてゐた。宿直日誌もつけなければならないし、他の患者を見廻に行かねばならない。それに元氣はいゝとは云へ重患の老人を相手に、長話をしてゐた事に氣が付いて、淡い後悔を感じながら逃げるやうにして部屋を出て行つた。

窓外から蟋蟀の聲がとぎれ〳〵に聞えてくる……。

「やつぱり、さうだつた、あの女の娘だつたのか。」

老人は惠美子が出て行った後、眠りもせず、ます〳〵さえた頭の中で、昔の思ひ出を新しく繰りひろげて行った。

「もう、あんな大きな娘があるのかなあ、似てゐる、たしかに生寫しだ。」

喉の底の方で聲に出ない言葉を呟いた。

鼻は少し低いが眼立つほどでもなく、小さい口、一重瞼、黒水晶のやうな瞳、愛くるしい八重歯、多すぎるほどの黒髪……正に彼女の面影である。惠美子の母の三十余年前の面影である。

「よう似てゐるなあ、母親である。たしかに……。」

輝吉老人はもう一度つぶやいて、己が青春の頃のフイルムを頭の中にくりひろげる。

（つゞく）

Compliments

OF

NATIONAL GROCERY CO.

MESA, ARIZ.

WHOLESALERS-QUALITY GROCERS

白百合

有田百

春風秋雨、夢のやうに二ヶ年が過ぎた。井上はローズを持つて銀子を訪問した。それは断然結婚申し込みを決心した結果であつた。

「銀子さん、私ねー人を今してお伺ひすることが、或は禮儀かと思ひますけれど……私の眞實の心持を聽いて戴くには、人が仲にあつては徹底しないし……。失禮ですがー聽いて下さいますか。」

「聽きますわ。話して頂戴。」

「國の親の賛成も得て居ますのです。貴女――私と結婚して下さらない?。お互ひが持つ將来の三四十年の生涯を、貴女と苦樂を共にし度ひのです。若し貴女の同意を得れば、私はほんとに生甲斐あるものと感謝します。」

井上は未だ曾つてない程眞面目な態度であつた。

暫く無言のまゝ、ジツト男を見詰めてゐた銀子は靜かに口を開いた。

「井上さんー。私……貴方に感謝しますのよ。でも……貴方の要求は受け入れられないわ。氣を悪くせずにねー。」

女は落付いてゐる。井上は少し焦り氣味である。

「銀子さん。貴女とならばキット幸福な家庭を持つことが出来ると信じます。それは過去二ヶ年有餘、貴女と交際してからの結論です。熟慮の結果です。」

「でも、私はさうは思ひませんの。貴方との結婚は、必ず不幸の晩年を送るものと信じますの。貴方の結論とは全然反對の結論ですの。」

「それは又どういふ根據によるのですか。貴女が私のことをどんなにお仰っても、決して氣を悪くしませんから、赤裸々に話して下さい。若し私に對して誤解でもあったら尚ほのこと……。」

「ではお話しませう。貴方と結婚することによって、五年或は八年間は、キット幸福な生活を持續することが出來ませう。私、それは確信しますわ。で其の期間後二人が同時に又は私が先に死んだとすると、それは〈〈ほんとに惠まれた生活ですわ。詩や繪画の國の生活ですわ。でも、それより以上私が長命をする者と假定すると、其處に大きな、醜悪な現實の問題が起るのです。つまり結婚生活の倦怠期に這入ります。第一に貴方はせセ歳、私は三十歳、これが不合理であること。第二は、それに私が醜婦であること。これが必ずや何れの日にか、總じて男性は若い美しい婦人に心惹かれることは必然的でありませう。第三、私の體質が優れてゐないこと。第四、それから貴方に、俗に云ふ女難の相があり、性格の何處かに文藝的と思はるゝ閃きがあること。言葉を更へて言へば、ローマンチック、之は決して悪い思想では無論ないでせうが、第一から第三

に述べた私の立場から言ふと、最も危険な素質の部分ですの。こうした觀点から推理して、私は二人の結婚は晩年に於て不幸に終ると断定するのです。」

「銀子さん―貴女の所論は、すべて悪い方にのみ解釋された結果ですよ。人生はもっと温い道義的に考慮すべきです。そして二人の愛情と、神に對する信仰に結ばれての生活は、すべての足らぬものを補ふことが出來るでせう。貴女が擧げた私の性格―之も修養によって、又貴女の導きによって直すことが出來ませう。どうか考へなほして下さい。」

「井上さん―私ね、ほんとに告白しますがね、私も青春の希望は多分に持ってゐましたの。貴方と結婚したなら―と云ふ假定の下に考へたことも、幾夜もありましたのよ。そして貴方がおつしやる所の愛情とか、信仰により、ガッチリとした結婚生活―など云ふことも想像しましたの。しかし嚴然たる現實世界は、さうした理想の生活は、先づ私の場合望むことが過誤であるとの結論に到達するのです。その都度、ほんとに泣きましたの。でも理性に依り、しかと諦めといふこと、自己の宿命だと觀念してゐる今日、私の心境は、寧ろ明鏡止水のやうですの。井上さん！どうぞ縁ないものと諦めて下さいね。私……ほんとに感謝してゐますけど――。」

銀子は何時の間にか双頬に涙を流してゐた。井上は吐息をついた。

「銀子さん！では……貴女は……私との結婚は断じてしないとお仰るのですね―。」

「そうですの。井上さん、私は貴方にはつきりと断言することが出來ますの。それは貴方とさへ結婚せぬ私は……私は……生涯決して結婚は致しません。何人とも……現實の醜悪な葛藤も惹き起さぬために、一人生涯を終ります。」

「そ……それは銀子さん―餘りのことです。もう一度愛情と信仰で築き上げた結婚生活の幸福を考へ直して下さい。ねー銀子さん。」

井上の眼にも涙が光つてゐた。そして井上の双手は、銀子の手を握つたまゝ銀子の膝頭の上に置かれてゐた。二人の眞心は今宵のやうに融け合つて、焔と燃えたことはなかつた。しかし此の焔は、何時までも〳〵合流しない、理智の冷かな焔であつた。

× × ×

井上は痛く胸を打たれた。銀子は、井上に取つては、或時は慈母であり、姉でもあつた。何かにつけて良友であつた。彼の全幅的に敬愛してゐる銀子が、自分が醜婦であることにより、年下の愛人との結婚が、必ずや不幸を招くであらうと云ふ断定の下に、愛人の熱心な申込みを断然拒絶した。そして其の信念のために、一生を獨身で暮す決心をした。正式に申込めば結婚してくれるものと信じてゐた愛人が、自分とも結婚せず、谷間の白百合のやうに清く、身を終らうといふ悲壯の決心――覺悟を涙の内に聞かされた時、遠の井上もガクリとした。夢の國、詩の國から突きおとされたやうな、現實のショックに、井上は

其の夜はまんじりともせず、頭を抱えて泣いた。

× × ×

宏壮な加州々廳の公園に、銀子と井上は靜かに歩いてゐる。男は語る。

「考へ直して下さいねー。契つて……お互ひが修養により、人間生活に勝利を得ることが出來ませうよ。キツト幸福な生活を打ち立てゝ、この限られた生涯を全ふしませうね。」

と言ひながら井上は、銀子の手を執った。

「有り難ふー井上さん。私……度々言ひます通り、私の感情は喜んで貴方と結婚するやうに命令しますの。理性は結婚生活を見限つて——と嚴命しますの。で、私は理性の命ずる所に從ふことが、最も賢明な身の振り方だと信じます。井上さん！どうぞ今迄通り友人のまゝにして下さい。」

「あれ程お願ひしても、聽入れてくれませんのねー。このやうに涙をもつて……。」

「私……私ー生涯貴方の愛情は、忘れは致しません。貴方は出來るだけ早く幸福な家庭の人となつて下さい。私はそれのみ念願してますわ。二人の間に結婚の話は以後プツツリと切りませうね。」

鬱蒼と茂つた大木の枝間より洩れる十三夜の月は、二人の男女の頰に流るゝ涙を、其の都度、哀れな青い光りに見せるのであった。

× × ×

銀子は米國政府から永久滞在の許可を得た。そして彼女が言つた通り、四十八歳の冬、肺炎のために忽然と他界するまで、その尊い一生を、同胞子弟の教育に捧げたのだつた。そして、其の永い間、井上との交友關係は少しも変らなかつた。

臨終の枕頭に立つた井上を、ジツト見詰めた銀子は、如何にも神々しい明眸を見開いて、井上に感謝するかの如く、限りない愛情に満ち〳〵た表情を目に浮べた。やがて二滴ー三滴ー玉の露を枕に落したのであつた。

井上は堪えかねた態度であつたが、無言のまゝ、靜かに銀子の額に吻けしたのであつた。

（をはり）

皆様の愛用の
マル昭

アリゾナ州グレンデール市
昭和醤油釀造會社

SHOWA SHOYU BREWING CO.
Rt. 2, Box 51, Glendale, Ariz.

看護婦

羽根政春

傳馬を發した羅府行きの列車がアリゾナ州アシフオークの驛に辷りこんだのはもう眞夜中を過ぎて居た。瞳たげな兵士達が大きな袋をかついでぞろぞろと降りて行った。此處でウイケンバーグ行きの列車に乘り換へるのである。私共少數の市民(シビリアン)も彼等に續いた。

「おや日本人が居るぜ。」

両手がスーツケースで塞がって居た同行のOさんが頤をグッと突き出して合圖した。見ると日本人の小娘が多勢の兵士達の後に立って居た。この頃の汽車旅行で日本人に逢ふのは珍らしくなつかしかった。私は眼で彼女の親か兄弟かを探したが見當らなかった。

老いた車掌が焦立ってわめき立てる兵士達にかまわず、綿密に乘車券を調べて、彼等を古コーチの中に追ひ込んだ。私は手荷物を棚に放り上げて上衣のコートを脱ぎ腰を下してホッとした。そして額の汗を拭きながらそっと周圍を見廻した。すると私の眼は私達のすぐ横に腰かけて先程から此方の方を見つめて居たであらうと思はれるさっきの日本人娘の視線にぶっつかった。最初見た程の若さではなかったが、こんな娘が今の時節に獨りで旅をする事への不審は私が此の娘と並んで腰かけて居る若い白人の兵士を見た時にすっかり氷解した樣に思った。白人の兵士と結婚して居る日本人娘が休暇を取った

歸省する夫を途中まで迎へに來たのである。此處まで來たのだから彼等がポストンに行くに相違はなかつたが私は此の娘の親達の心情を思つて心を暗くした。如何程コスモポライトでも私はまだ白人や黒人と私の子供を結婚させたくない。私は此の娘が夫として此の青年を館府に連れて來る事がどれだけ親達の肩身をせばめる事であらうかと私の思想をもつて此の娘の両親の心事を推測して淋しい氣持になつた。

汽車が動き出した。

「テケツ　プリース　テケツ」

老いた車掌が又切符を調べて歩いた。そして調べの済んだ人の窓の所へ小さな紙片をはさんで置いては次の人のを調べた。紙片が白色であれば次の乗換驛で降りる人、赤色のは乗換へずに行く人である。

車掌が通り過ぎて私はもう一度私の横の若い男女の方を見た。私は此の度の長い汽車旅行で隨分此の國の若い男女が公衆の中で不行儀な事をするのを見た。勿論不行儀だと思ふのは私の觀方で此の國の人達から見れば普通の事かも知れないが私は同席して居る若い男女が肩に凭れ合つたり膝枕したりするのを見るとたまらなく不快であつた。

如何に此の娘が日本人の血を引いて居ようと白人と結婚する程の娘である。彼女の道德思想が日本人離れしてない譯がない。併し此の娘は決して姿勢は崩さなかつた。相手の兵士も行儀の悪い寛ぎ方をしなかつた。彼等はボソボソと低聲で話し合つて居たが豫想して居た痴態を演じなかつたばかりか又さ

程親密な間柄であるようにもつとこまかつた。

私は此の人達に就いての最初の想像をぶち壊して、彼等を兄妹だと心の中で決め直したのであつた。白人によく似た兄を持つ妹であると決めたのである。紛れもなく彼は白人の形態を持つて居るが思ひなしか何處か日本人らしい感じをかすかながら與へて居るやうに思はれて來たのであつた。

汽車が名を知らぬ小さな驛で二三人の客を拾つて又走り出した。もう新入者達には座席がなかつた。其の中の中年の男がこれも中年の白婦人の二人並んで腰かけて居る側へ來て立つた。

車掌は新乘客の切符を調べてから電燈を消した。豆電燈が一つだけ残つて車内は暗くなつた。

朝の三時頃であつた。

兵士達は皆眠つた。私も連日の汽車旅行に疲れてうと〳〵とした。不圖人の忍び笑ひに似たざわめきを感じて目を醒した。聲のする方を振り向くと、今立つて居た中年男が二人の婦人の座席に割込んで腰を下した所であつた。いま〳〵しいので私は身體のむきを換へて又眼を閉ぢかけたが、も一度例の日本人娘の方を見た。兄の兵士は流石に疲れたらしく窓緣に肱を並べて其の上に額を載せてねむつてゐた。妹は兩脚をキチンと揃へて眞直ぐに座つて居たが右手を額に當てゝ額を隠して居た。睡つて居るのか覺めて居るのか分らなかつたが長い汽車旅行で今の彼女程端然として眠つて居た者を私は男でも女でも見た事がなかつた。私はたつた先

刻まで此の娘が親の意志にそむいて白人と結婚して居ると心に決め、そのような娘なる故に汽車の中で他の白人の男女がなすやうな痴態を演ずるだらうと豫想して屈辱を感じて居たのであったが、今かうした立派な彼女の恣態を見て急に日本人としての民族的誇りをすら感ずるに至った私の得手勝手さに苦笑したのである。

けれ共私は此の異形な兄を持つ妹と其の両親の心情を思って悲しかった。彼女が私の視線を避けやうとするのは流石に此の兄を私達に恥ぢて居るからではなからうか。そんな事を思ひながら私は又うと〳〵とした。

老いた車掌が私の腕を揺ってゆさぶった。ウイケンバーグへ五分間で着くと言ふ。吃驚して私は降り仕度を初めた。夜はもうすっかり明けてゐた。

日本人娘は身仕度をしてキチンと坐って居た。其の時初めて私は此の娘の着て居るのがユニフォームである事に氣が付いた。ワクスのに較べて極めて目立たないユニフォームであった。

私は車掌が残して置いた彼女の窓際の紙片を見た。一枚は白であったが他の一枚は赤であった。兵士は彼女と一緒に此處で降りるのではなかったのである。

私達は先程の中年男が二人の婦人の中に割り込んで一人の婦人を腕の下に抱いて居るそばを通り抜けて昇降口まで歩いた。

汽車が停るのを待つ間に私は娘に問ひかけた。

「何處から乘ったのです？」

娘は明瞭な日本語で答へた。

「コロラドスプリングの看護婦學校から休暇をもらって來ましたの。」（終）

西郷南洲遺訓

近頃讀んだ書物の中、南洲翁の遺訓は特に現下の我々に教訓する處が多い。茲にその一節を掲げさせて頂く。

「變事俄に到來し、動揺せず、從容其変に應ずるものは、事の起らざる今日に定まらずんばあるべからず。変起らば、只それに應ずるのみなり。古人曰、「大丈夫胸中灑々落々。如光風霽月。任其自然。何有一毫之動心哉。」是即ち標的なり。如此体のもの、何ぞ動揺すべきものあらんや。」

三大製品

大黒印 白味噌

大黒印 寶干麹

US印 亀甲萬

デンバー市 ラリマー街

羅府醤油釀造會社

5500 LARIMER ST. DENVER, COLO.

編輯後記

○五月號の「ポストン繪物語」に引續いて、六月號の「寫眞特輯號」も非常な好評を以て迎へられた。今月號の表紙繪は夏に相應しい金魚と水草、一見して涼しい感じを受ける佳作、大森和子孃（第六部落）の作品である。

○今月號に翠川敏氏が休まれたのは淋しい。次號より再び麗筆を寄せて頂きたい。尚今月號には野田、貴家、鈴木、恒吉諸氏の玉稿を得たことを欣びたい。

○五月から六月にかけて諸種の催しが続き、ポストン人にとっては誠に恵まれた月であった。試みにそれを列挙して見ると、中島智穂子師匠の琴友會春季温習會、第一演藝協會の歌舞伎劇伽羅千代萩、鈴木千秋師匠の長唄温習會、花柳徳八重師匠の舞踊の夕、ヒラ浪曲會の浪曲の夕、遠井錦聲女史の錦聲會第一回温習會、日本映画二人妻、それから二世の若人達のために特別映画や"Lamp Lighter's Serenade"や、ポストンの生活に取材した劇"Sandstorm and Star"等十指に余るであろう。

○昨年六月以来、最も面倒な仕事である會計事務をやってくれた亀重久子孃は、御両親と共に近くオレゴン州へ再轉住される事になり、六月限り辭任された。茲に久子孃の勞を謝し、その前途に幸多かれと祈るものである。

○最近本誌の支持者が相次いで出所するが、今月も本協會理事長稲垣國次（敬東）氏夫妻は東行され、理事野田實造（夏泉）氏は古巣羅府へ歸還された。御幸福を祈る。

○稲垣牧東氏、印刷所の東氏の御夫人及びツーリレーキの竹原氏より御寄附を頂いた。茲に深甚なる謝意を表す。

Vol. 3, no. 7
July 1945

○毎度印刷製本に盡力して下さる方の芳名を掲げて感謝の意を表します。

正木良夫
永瀬　勇
永瀬正臣
中林夫人
北林夫人
大池夫人
伊勢田夫人
貴家夫人
谷本晩香
児玉良之助
久留島夫人
井上正次
芳川積三
櫛田篤太郎
松原夫人
松原定雄
有田夫人
有田井デス
有田ドレス
酒井知巳
田中綾子
田中龍一
亀重久子
藤田静子
西田花子
石丸九十九
外川　明
北村俊夫
谷口　清
池田錦城
玉岡貫一
東壽美吉
中嶋　一
進藤舟水
瀧井謹平
（以上順序不同）

ポストン文藝　第參卷第七號
一九四五七月號
（本号定價二十仙　外部郵税共二十五仙）

編輯人　松原信雄
同　有田百
同　島原潮風
同　重富初枝

印刷所　ポストン印刷所

發行所　ポストン文藝協會
（統政部内）
POSTON POETRY CLUB,
UNIT I CITY HALL,
POSTON, ARIZ.

POSTON POETRY CLUB

POSTON, ARIZ.